

明治維新のリーダーシップ：「日本人の心を見にゆこう」続篇

著者	中西 洋
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会志林
巻	63
号	1
ページ	1-40
発行年	2016-07
URL	http://doi.org/10.15002/00021215

明治維新のリーダーシップ

〔「日本人の心を見にゆこう」続篇〕

中 西 洋

以下は近代日本の出発点となったとされる明治維新とは何だったのかという主題を、それを担った代表的な人物、4名に即して考えてみようとしています。それはもう論じつくされたテーマであると言ってもいいし、実際、この小論が新たに発見してつけ加えた史実があるわけでもない。

まず「王制復古」のスローガンが掲げられたことを思いだす。これは体裁だけのことだと多くの人は考えた。事実はどうか？

しかし、第2次大戦の敗北までに私たちが体験した歴史はそう単純ではない。戦争とならんで進化した近現代の科学・技術は多くのことを変えたが、日本人の心のありようをどう変えたのかはあまり明らかになってはいない。「王制」のいかんはともあれ、「復古」はいま現実の動きになっている。私たちは何をどう維持し、どう蘇えらせたのか、これは150年前でなく今日の問題である。

-
1. 吉田松陰
 2. 高杉晋作
 3. 西郷隆盛
 4. 勝海舟

1. 吉田松陰〔1830～1859年〕

- (1) まず第1に挙げなければならないのは吉田松陰でしょう。〈近代〉化とは一言でいえば、主権国家をつくることです。19世紀のヨーロッパ諸国の東アジア侵略に抗してこの仕事を成し遂げたのは日本だけだったと言ってよい。形のうえではタイ王国〔ラタナコーシン王朝〕も主権を維持したのですが、それはイギリスとフランスの植民地争奪がこの地で拮抗したことから生じた結果、タイはサメのようにおそってきたこの両国に足を喰いちぎられたタコのような状態で自国の本体をようやく守りとおせたのでした。日本も維新の直前の時点では、徳川幕府を全面的に応援するフランスと薩長に肩入れしようとするイギリスという構図になって、内戦が長びけば、国際的な植民地争いの場になりかねない状況にあったのです。もっとも日本には、小国であるにせよ既得権をもっているオランダがすでにあり、まだ生れたばかりの自由な国家、アメリカや、北から東アジアに進出の機会をねらっているロシアというように、諸国の腹の探

り合いがはじめていたので、いずれかの1国がここに支配権を築くことはむずかしかったという事情がありました。それらのうちで、アメリカのペリーの‘黒船’を最初の交渉相手とすることができたのは日本にとっては僥倖だったのです。

- (2) 松陰は、偶々ですが、このとき江戸にいて、黒船来航〔1853（嘉永6）年6月3日〕を耳にして、その翌々日にはすでに浦賀まで行ってこれを実見しています。「……孰れ交兵に及ぶべきか、しかし船も砲も敵せず、勝算甚だ少く候……」というのが彼の感想でした。松陰というと松下村塾、松下村塾というと『講孟笥記』『孟子』講義録がすぐ思い出されて、立派な教育者だったんだろうとまず考えてしまうのですが、彼の真骨頂は行動家だったというところにあります。彼の文章の素直さ、鋭どさ、闊達さはとうてい真似のできない魅力にあふれていますが、これは机の上の学問からは生じえないものです。〈志士〉の文章と言ってよいのですが、主観的な思い込みではなく、現実を直視した判断であり提言なのでした。これは彼のこのときまでの経歴をみればわかります。長州藩士、杉百合之助〔家禄26石〕の次男として生れ、吉田家〔家禄57石；山鹿流兵学師範〕の養子となり、藩校明倫館で『武教全書』（山鹿素行）、『孫子』、『中庸』などを講じていますが、まず九州各地に遊学して〔1850（嘉永3）年〕——長崎では海外事情を学びオランダ軍艦に試乗——文武知名の士を歴訪し、翌年藩主に従って江戸に出て佐久間象山らに学び、次いで東北諸国遊歴の許可を受けるのですが、旅行免状の発給を待ち切れずに藩邸を「亡命」、水戸で志士たちに交わり、会津、佐渡を廻って江戸に帰着〔亡命の罪をもって土籍・家禄剥奪、実父杉百合之助の^{はぐくみ}嗣（=育）となる〕、翌嘉永6年「十年間諸国遊学」を許され、各地を巡って江戸に至る……というこで、ペリーの黒船を真先きに見る機会をえたのです。しかもその直後から海外視察を計画、長崎来泊中のロシアの軍艦に便乗しようと長崎に至るも出航に間に合わず、翌安政元年、再来して日米修好条約を結んだペリーの艦に従僕1人をつれて小舟で乗りつけるが、渡航を拒絶されて入獄、長州藩に引き渡されて獄中で『孟子』の講読会を始めるという流れになるのでした。この時点で彼ほど日本社会の実情を知る人物はいなかったでしょう。

- (3) 松陰が打ち出した方針はこうでした——「……方今外夷四面ヨリ我ヤ^{キングキ}罅隙ヲ伺フ、此時ニ当テ六十州ノ人心ヨ一^ウ塊石トナシ、以テ小醜ヲ懲ラシ、海波ヲ清メン事尤モ願フ所ナリ」。その行動スローガンは「神州光隆、四夷^{ベンバツ}撻伐」です。「四夷撻伐」と言っても単純に‘尊皇’を唱えて‘攘夷’を叫ぶたぐいではありません。また‘開国’そのものが悪いときめつけるものでもありません。人々が心をあわせ、「神州」が「一塊石」となるような体制を整えて、主体的に外夷に対応しなければならないというのです。戦いに敗れて支配されるということよりも、いまの幕府のやり方のように無定見でただ受身に事を荒立てないようにと‘開国’要求に応じてゆくのであれば、事態は「治世から乱世なしに亡国ニナル」だろう。これはわが「国朝ニテ先例ナキ事ナレハ人^{ツヤ}輒（輒）スク信サレドモ宋ノ遼・金・元ニ亡フルモ此姿ナリ」。むしろ「和親中ニテ亡」びることを警戒しなければならないとみるのであって、「墨夷モシ徳川ヲ滅セス深く援救シテ兵械糧食等ヲ与へ属国トスル時ハ坐ナカラ滅スル道理ナリ……」というのでし

た。アメリカがこういうやり方に出るのではないかというこの彼の予想は、さきに述べたようにこの国がまだ帝国主義的路線を追求するほどに成熟していなかったことを知らなかったためなのですが、フランスがやがてその通りの政策をとって幕府に接近するようになるという点では的外れではなかったのです。松陰は、こうした危険を理解した人物が政局を担う必要があると考えるのですが、「墨夷大統領ハ実今ノ將軍ヨリハ智アリ来使ハ〔老中〕堀田・間部ヨリハ才アリ是テハ遂ニ一矢一鏃ヲ費サズ降参スルモ無理カラズ」とみたのです。

松陰はしかし、既存の体制を否定してかかったわけではありません。「凡ソ七道ノ諸藩、孰カ天子ノ命ヲ奉シ、幕府ノ令ニ従フ者ニ非ヤ、相共ニ心ヲ協ヘカヲ合セ、天朝幕府ニ奉事スヘキハ固^{モトヨリ}其職ナリ……」と言っています。しかし幕府はあまりに無気力で無定見でした。国を閉すか開くかを決めることは世俗の事柄ですから、その権限は当然に將軍にあると一般に考えられていたのですし、事実‘鎖国’は幕府の独断で行われたのですから、‘開国’の勅許を得る必要などもともとなかったわけです。それなのに、条約締結への異論を圧えつけようとして朝廷の許可を求めたことは幕府の自殺行為でした。外交権・軍事権の行使は主権者たる者の証しですから、この権限の最終的保持者が天皇であるというなら、征夷大將軍たる徳川家の当主は、その肩書きはどうあれ、天皇の代行者に過ぎないということになります。しかも更に悪いことは、朝廷が‘開港’に反対して、幕府に再考をうながすと、今度はそれを無視して予定通り通商条約締結を強行したのです。この2重の誤りによって、幕府は世俗の権力者であることを自ら否定しただけでなく、自らが最高権力者と認めた朝廷に反逆する不忠の臣になってしまったのです。このときまで、「尊王」という観念は実践的な意味をもたない抽象的な言葉として一般に受け入れられてきたのですが、このときから‘反幕’を含意するものになりました。「攘夷」という言葉も、文字通りの意味で唱えるものはほとんどいなかったのに、「開国」の反意語として一人歩きをはじめたのでした。そして、天皇のために、あるいは天皇の許しがあれば、徳川家の意向に優先して、何でもやってさしつかえないという考え方がまかり通ることになったのです。ここでもし朝廷がしっかりしていれば、それはそれで筋が通ったでしょう。しかし、朝廷の政治能力の欠如はまた極限的でした。徳川第2代秀忠時代の「禁中並公家諸法度」〔1615（元和1）年〕の制定から数えてもすでに250年近く政治から完全に疎外されてきたのですから無理もないことでした。

- (4) 松陰は絶望的になります。かつては「幕府と共々天朝ヲ尊フナリ」と言っていたのに、「……相共ニ幕府ヲ諫争シ……」と変り、最終的には「幕府遂ニ人ナシ」と断定し、‘討幕’のほかなしという考えになります〔安政6年4月〕。朝廷もただ外人ぎらいだと言いはるだけです；

「徳川存スル内ハ遂ニ墨・魯・暗・仏ニ制セラル、事トレ程ニ立行ベクモ計リ難ク……幸ニ上ニ明天子アリ深く愛ニ 叡慮ヲ惱サレタレドモ搢紳衣魚〔朝廷の高官；書物から得た知識も利用できない〕ノ陋習ハ幕府ヨリ更ニ甚シク但外夷ヲ近テハ神ノ汀レト申事計ニテ上古ノ雄図遠略等ハ少モ思召サレズ事ノ成ラヌモ固ヨリ其所ナリ……」

幕府もダメ、朝廷もダメというばかりでなく、これに従う諸藩も——そこには当然彼自身の属する長州藩も——すべて腰ぬけであるとすれば、もう人は問わない；英雄の登場を待望するしかない……というところに松陰は行きつくのです；——

「列藩・諸侯ニ至テハ征夷ノ鼻息ヲ仰ク迄ニテ何ノ建明モナシ征夷外夷ニ降参スレハ其後ニ從テ降参スル外ニ手段ナシ独立不覇三千年來ノ大日本一朝人ノ羈縛ヲ受クル事血性アル者視ルニ忍フベケンヤ那波列翁ヲ起シテフレーヘッド〔自由〕ヲ唱ネハ腹悶医シ難シ……草莽崛起ノ人ヲ望ム外頼ナシ……」

ここで突然ナポレオンの名を引合いに出したとき、彼がフランス市民革命をどうイメージしていたのか、もっと知りたいところですが、これに並べて古代漢王朝の創立者、劉邦と彼に敗れた項羽を挙げて、「大要今の假ニテハ神州陸沈疑ナシ恢復ノ策ハ劉項ノ那波列翁等ニ非ザレハ出来ガタシ而シテ今未タ爰ニ著眼ノ人ヲ見ズ……」と言っているところから推せば、彼のいう日本全土の「一塊石」化を実現してくれる独裁的な軍事的英雄ならば誰でも良い；それは既存の支配体制にコミットしている人でなく、社会の底辺から立ち上ってくる人物としてしか考えられないというほどの意味だったのでしょう。

しかし、その「草莽崛起ノ人」、「大識見大才氣の人」は実際この世に求めうるのでしょうか？ 彼は全くの空想的願望を語ったわけではありません。自分の弟子についても、「暢夫」〔高杉晋作〕、「無逸」〔吉田栄太郎〕、「実甫」〔久坂玄瑞〕の3人を「吾れに於て良薬の利ある」者として名指しています。しかしそれもいまのところでは「吾が交遊中、言ふに足る者なし」と言うしかない。では松陰自身はどうなのか？ 「僕固ヨリ其成スベカラザルハ知レドモ昨年以來微力相応ニ粉骨碎身スレドモ裨益ナシ徒ニ岸獄ニ坐スルヲ得ルノミ」と言うのです。これは安政5年——松陰は前年末から禁獄を解かれて実家にお預けになっていたのですが——11月同志17名と血盟して、井伊大老の代理として上京中の老中間部詮勝を「要撃」する策をたてたため、再び投獄されるに至ったことを指すのです。間部1人を殺して眼前の政治情勢が変るものではありませんから、彼の「旧友」である桂小五郎〔木戸孝允〕をはじめとして門人も一入江杉蔵・野村和作の兄弟のほかは——全員反対するのですが、「尊皇攘夷は人々之れを言へども、吾が藩未だ一士の死を以てこれを為すものならず。豈に大恥に非ずや」と言い、松陰は「僕が死ヲ求ムルハ生テ事ヲナスヘキ目途ナシ……此度大事ニ一人モ死ぬモノ」ナキ余リモ余リモ日本人が臆病ニなり切タガムコイカラー一人ナリト死デ見セたら朋友故旧生残タモノ共も少シハカヲ致シテ呉フカト云迄ナリ」と引下らないのです。これは無謀といえ無謀ですが、しかし国内の政治危機はこの時頂点に達していたのです。井伊直弼が大老に就任〔安政5年4月〕して翌々月通商条約に調印するや、これに反対する徳川斉昭ら幕府内部の有力者をもことごとく処罰し、更には梅田雲浜、頼三樹三郎、橋本左内ら著名な憂国の志士たちを捕えて投獄する挙に出たのです。ここまで繰り返して藩政府に時勢の切迫を説き変革の急務を提言してきたにもかかわらず、すべて無視された松陰が事の成否を度外視して突出するしかないと決意したのはそれなりの理由がありました。この時幕府体制は完全に「制度疲労」を起していた

のにもかかわらず、それを突き崩す突破口をつくる行動がまだ生れていなかったのです。しかし松陰の間部要撃計画を知った藩主脳部は彼を再投獄し、幕府の引渡し命令に従い、松陰は——頼、橋本らに続いて——江戸・伝馬町の獄舎で死刑に処せられたのでした〔安政6年10月〕。いわゆる‘安政の大獄’ですが、翌年3月井伊は桜田門外で暗殺され〔‘桜田門外の変’、万延1（1860）年3月〕、幕府の強圧政策も頓挫したのでした。ここで情況は反転し、皇妹和富と第14代将軍家茂との結婚に象徴される朝幕融和の流れとなり、文久2〔1862〕年11月には勅命によって幕府は松陰らの罪を免ずるという決定を下すまでになったのでした。

- (5) 吉田松陰とはどういう人だったのか？ もって生れた素質は言行ともに率直すぎるほど率直なところにあると言えまじょうが、単純に直情径行というのではなく、突出するのも反省するのもあまりに正直で誰からもにくまれぬ性格でした。世俗の秩序のみならず、聖賢の教えにもおもねらないという限りで臨済の〈無依〉に似たところがあります。歴史からも現実からも弟子たちからも学びながら、自分の判断に自信をもつようになってゆくのですが、敢えて他人を説得しようというわけではありません。「吾れ独り吾が志を行ひ必ずしも人に語らず」、「兵は精なるを貴び、衆^{おお}きを貴はず、況や有志の士は募りて求むべきものに非ざるなり」という姿勢でした。

彼はまた「吾れ平生、飲を貪らず色に耽らず、楽しむ所のものは好書と良友とのみ」と言っていますが、確かに勉強好きな人でした。学者としての一面もっています。当然儒学にも通じているのですが、しかし彼は兵学を家学として継いだのですから、机上の経学ではありません。〈兵法〉は端的に言えば‘勝つための技法’ですから、技術学であり、実践の学です。10歳代の末まで長州にあった頃の彼のいわば自然科学者の眼が社会科学者の眼になりつつあったのは九州から東北地方までの観察の旅だったのですが、とくに長崎でオランダ人を介して西洋文明の一端を実見し、西欧諸国の日本への接近が差しせまったものになっていることを知ったときからでした。自分の学んできた兵学ではこれに対処できないと考え、江戸に出てお佐久間象山について西洋事情を学び、更に海外渡航を企てる成り行きになるのですが、これは〈兵法〉流に言えば‘敵を知る’という一面ですから、同時に‘己を知る’こと、つまり——ただ「防長＝国」の策ということではなく——西欧を迎えうつ〈日本〉とは何かをあらためて考えねばならなくなったのです。藩主の許可証を手にするのを待ち切れず「亡命」までして水戸に至り、宮部鼎蔵ら尊王を唱えるいわゆる水戸学の人士と交って日本の‘歴史’に眼を開くことになるのです。

こうして松陰はいよいよやってきたペリーの黒船を実見した直後、藩士に上書した一文〔『将及私言』〕のなかで、「天下は天朝の天下にして、乃ち天下の天下なり。幕府の私有に非ず。故に天下の内何れにても外夷の侮りを受くれば、幕府は固より当に天下の諸侯^{まさ}を率いて天下の恥辱を濯ぐべく、以て天朝の宸襟を慰め奉るべし。……」と述べることになります。ここで彼は「幕府の天下」を超えて、「天朝の天下」に言い及んでいますが、「天下の天下」にまでは行きつかない。もしそうなら、中国の古典の意味の「天下の天下」とは‘天下万民の天下’のこと

ですから、〈天下〉＝〈万民〉の意向次第で天皇＝「天子」の廃嫡も避けられないこととなります。ですから、天朝のオーソリティは天皇が〈天〉によって任命された「天子」であることによるのではなく、「天日の日嗣^{ひつぎ}」つまり〈天〉そのものの子孫であると言いはらなければならなくなり、その根拠はと問えば「天祖之訓」つまりアマテラスが孫のニギハヤヒの「葦原の中ツ国」への降臨にあたって与えたいわゆる‘天壤無窮の神勅’しかないことになるのでした。この立論に論理が乏しいことを松陰は知っていました。14世紀に後醍醐天皇によって試みられた‘建武中興’が2年ももちこらええずに終わった故事を想起して、「中興之理」をたてる必要を感じながら、「吾まさに中興の論を^{たて}上まつらんとすれども思慮^{おぼ}いまだ足ばす、後日に俟つ……」と述べています。理論が立って結論が出るというのではなく、正しい結論——日本の主権の確立——があって、それをあとから論理的に裏付けようとするまさに実践的学風なのです。なおここで留意すべきことは‘天皇主権’をうえのように正統化するやり方が当面は西欧なり強に対峙することを眼目にしながら、同時にアジアの中心国である中国に対する日本の優越をも含意することになった点です。「凡ソ漢土ノ流ハ皇天下民ヲ降シテ、是カ君師ナケレハ治ラズ、……故ニ其人職ニ称ハズ、億兆ヲ治ムル事能ハサレハ、天亦必ズ是ヲ廃ス……本邦ハ即チ然ラズ、天回ノ嗣永ク天壤ト無窮ナル者ニテ……億兆ノ人宜シク日嗣ト休戚ヲ同シテ復タ他念アルベカラズ……」^{漢土ニハ人民有リテ、然ル後天子有リ、皇国ニハ神聖有リテ、然ル後蒼生有リ、国体固ヨリ異ナリ、君臣何ゾ同ジカラン、……}と「国体」の「独」を主張したのでした。^{*}

- (6) しかしもしそうであるなら、松陰はどうしてあれほどに『孟子』に傾倒したのでしょうか？ 聖賢の言行はただ中国を日本と対比するための材料だったのでしょうか。確かに、新しい〈国家〉を構想するためには孔孟の教えは役に立ちません。しかし彼は「国体は一国の体にして、いわゆる独なり」と言うとともに、「道は天下公共の道にして、いわゆる同なり」とも言っています。この〈道〉がいわゆる人倫のすべてを包むものであるなら、この「独」と「同」の区別は正確ではありません。国体の「独」は君臣関係をも「独」とすることになるからです。松陰は『講孟割記』の冒頭でこれを「君ト父トハ其義一ナリ」と言い、「孔孟生国ヲ離レテ、他国ニ事を給フ事……我父ヲ頑愚トシテ家ヲ出テ隣家ノ翁ヲ父トスルニ齊シ……」と批判しています。孔子はともあれ、孟子についていえば、人倫を‘君臣、父子、……’とは言わず、「父子、君臣、……」と序列づけ、その規範を‘仁、義……’とせず、「親、義……」としているので、松陰と大きくは隔っていないのですが、ともあれ松陰は君臣間に〈契約〉性——権利・

* 故元滅宋明誅元
天為赤星眷中原
中原一姓不再起
何比神州皇統尊
……………

胡元、宋を滅せしも、明ノ元を誅す
天、赤星〔中国〕の爲めに中原を眷みる
中原、一姓〔同姓の王朝〕再び起たず
何ぞ比せん神州皇統の尊
……………

義務関係が忍び込むことを拒否しているのです。しかしこうなると「名君賢主」は必要条件でなくなりますから、〈君道〉ないし〈王道〉の如何は問題でなく、ただ一方的に〈臣道〉だけを考えればよいということになります*。そしてそのことが日本で〈主権〉を構想することを困難にするのでした。

- (7) ですから松陰の〈道〉の基本は‘道徳’——つまり人間関係のルール——ではありません。他者はどうあれ、自分がどう生きるべきか、その究極の規範を孟子との「同」として考究しようというのでした。この意味で松陰がつかんだのが〈誠〉と〈狂〉だったと思われます。〈誠〉についていえば、「至誠にして動かざるものは未だこれ有らざる也」は『孟子』の言葉であり——松陰の言い方では「人唯一誠ナリ」となります——、その誠を思い〈志〉を行おうとする者の覚悟を述べて「志士は溝壑に在るを忘れず」と励ましたのも孟子でした。

〈狂〉は、うえにいう覚悟の極限として松陰が常用した言葉です。この語を用いて自らを「狂頑」「狂愚」「狂生」「狂夫」などと称した例が25種にもものぼると数えた人がいます。これもまた『孟子』の最終巻の結びの章に「孔子は中道を得て之に与^{まじ}わりえざる時は、必ずや狂^{きやう}獯か。狂者は進んで取り、獯者は為さざるあるなり」とあるところを読み解いてのものです。「中道」〔=中庸〕の人を見つけることはむろん最も望ましいのですが、そうはゆかないなら次善の人として「狂」者を求め、それでもダメなら「獯」者を選んで交りたいというのであり、逆にいえば一見謹直にふるまって俗世に容れられている「郷原」の人はむしろ「徳の賊」だということです。

では、〈狂者〉とはどういう者たちなのか——「其の志がやたらに大きく、言い草が偉そうであり、実行を考えずに物を言い、言ったことを顧みずに実行するといった者たちであり、口ぐせのように古の人、古の人と言って古の聖賢をたたえ、人と親しもうとせず、人からも親しまれない」者たちだということです。

また〈獯者〉とは保守的ではあっても「不義の行為を^{いさじよい}屑しとしない者たち」です。

これらに対して〈郷原の人〉とは、^{うわべ}「表面をつくるのが上手で」「これを非難しようとしてもとりたてて言うほどのこともなく、これを攻撃しようとしても攻撃するほどのことを見出せない。世俗に^{どう}同じ、^{おせい}汙世に合わせ、忠信の人に似せて廉潔の士のように振舞うので、世間の人

* 論理的にはそうなりますが、それでは現実の政治は動かせません。「今上の〔天子の〕叡聖があり、「吾が藩〔に〕明君あり」と前提し、悪いのはそれを取りまく「衆小人」「衆邪人」である、故に「草莽の崛起」によって小人・邪人を除き、「正人君子をして其の所を得しめよ」と言うのですが、この前提は事実とは言えません。「吾が公は即ち尊攘の人なり。……今は則ち然らず、公旨を^く屈して、幕府に媚び朝廷に^{たが}違ふ、是れ誰れか其の謀に主たる者ぞ。〔藩〕政府の諸君、^{いず}寧んぞ其の責を免かるることを得んや。……」と毛利藩主の政治的リーダーシップの不在を免責してしまうのは、事態の正確な認識ではないのです。にもかかわらず「吾れ君公の明旨に感ずること甚だ深し」というところから論を起すので、かつて「英雄」たるべき者として提起した「草莽崛起ノ人」も旧い権力者に代って新しい社会の主人公になる展望も失われてしまうのです。藩の忠臣という自己規定から脱しえないところに松陰の限界があったのです。

たちも皆これを悦び、自らもこれでよいと思っている」ような人たちである。しかし彼らはとうてい「堯・舜の道に入ることはできないのであり、徳に「似て非なる者」として悪むべき者だということです。

この孟子の解説に松陰は全く共感します。自身が置かれている今の世をこれと全く重ねて考えられるというのです。

「是時ニ当テ中道ノ士ノ邊カニ得ヘカラサルハ古今一也、故ニ此道ヲ興スニハ、狂者ニ非レハ興ス事能ハス、此道ヲ守ルニハ、獯者ニ非サレハ守ル事能ハス、則チ其狂獯ヲ渴望スル事、亦豈孔孟ト異ナランヤ、且郷原ノ害、今猶古ノ如シ、其人、口ニハ孔孟程朱ヲ唱ヘ、身ニハ忠信廉潔ヲ飾リ、其吾輩ヲ視ル事鬼蜮ノ如ク、蛇蝎ノ如ク、国体ヲ尊ヒ、夷変ヲ憂ヒ、臣節ヲ励マシ、人材ヲ育スルノ説ヲ悪ム事、異端曲説外道邪魔ノ如シ、此説熄マスンハ天地ノ誣罔ニ陥リ、道義ノ荆榛ヲ生スル勢禁スヘカラサルノミ……」

以上のような松陰の注釈は、幕末の世が日本社会の変革を志さず彼を徹底して抑圧していたさまを余すところなく物語ると共に、そのなかで彼が自から〈狂者〉を演じなければならないと決意した情況を生々と伝えていると言ってよいでしょう。しかしひとつ気にかかるのは、ここで言うまでもなく望ましいとされている〈中道の人〉のイメージです。孔・孟にとってはそれは堯・舜・禹・湯・文といった聖賢であり且つ帝王であったわけではっきりしているわけですが、松陰にとってはどのような人を考ええたのかという点です。誰かが「明君通儒」となるのでなければ「狂獯」はどこまでも「狂獯」に止まるしかありません。「聖賢是ヲ教戒裁正シテ中道ニ帰スルニ至テハ、其志固ヨリ高く、其意固ヨリ遠キ者ナレハ、超然トシテ聖人ノ道ニ進ム事、期シテ待ツヘシ」とはならないのです。これは松陰の〈国家〉論、則ち〈主権〉者論が未熟であったことと対応すると思えます。松陰の考える「草莽崛起ノ人」はおそらく「狂者」でしょうから、その人は自力で「聖賢」にも成るのでなければならぬのでしょう。

ともあれ松陰は立ち止るわけにはゆきません。「古之人、古之人」と言いつのる「狂者」に対して、彼は「余常ニ謂フ、古人今人異ナル事ナシ、古人モ郷原ハ郷原也、庸俗ハ庸俗也、今人も豪傑ハ豪傑也、狂獯ハ狂獯也、……堯舜湯文孔孟ノ如キハ、古今ニモ稀ナル人ニテ、五百年乃チ一人アルノミ、……苟モ人々自ラ激昂セハ、今豈古ニ譲ランヤ、冀クハ今ヨリ諸君ト共ニ激昂シ、上往聖ヲ継キ、下万世ヲ開クニ足ラハ、吾党ト雖ドモ亦古之人ニ非ルハナシ……」と自ら奮い立つことを要請したのでした。聞く人の心をゆさぶらずにはおかない見事なアジェーションです。

しかし、こうして「狂人」をさえ「激昂」させる狂人となった松陰はもはやただの狂人ではありえません。そして『孟子』の最後の言葉、「然而無有乎爾、則亦無有乎爾」〔然而にして有ることなくんば、則ち亦有ることなからん〕を引いて、「此語孟子自任シ、又千万世ニ向テ吾輩ヲ呼醒スノ語也……」と言うことになります。孟子が思うには、堯・舜より湯に至るまで、湯から文王に至るまで、文王から孔子に至るまで、それぞれ500有余年であるのに、孔子からこのかた今に至るまでは100有余年でまだ遠くはないし、孔子の国、魯と私の住む籬の地はこ

のように近い、いまこの聖人の道を知って伝える者がなければ、今からあとこれを伝え聞くものがなくなってしまうだろうというのですが、松陰はこれをうけて、「孟子ヨリ今ニ至ル迄二千余年、……今吾輩断然自ラ任セズンハ、何ソ後世ニ待ツ事ヲ得ンヤ、又何ヲ往世ニ^{サカノボ}派ル事ヲ得ンヤ……抑吾長門ノ国タル、西海ノ陬ニアリ、海ヲ隔テ、西鄒魯ト対峙ス、鄒魯ノ聖賢ヲ喚起ス〔ル〕事固ヨリ長門ノ任也」と主張するのです。孔孟の道を継ぐのはこの自分しかないという内に秘めた想い、これが思想家としてその生涯を全うした松陰の自負だったのです。

2. 高杉晋作〔1839-1867年〕

- (1) 松陰が「草莽崛起ノ人」の出現を待望しつつ、自分の弟子について3人の名をあげたことは先に触れましたが、そのなかで最も期待したのが高杉晋作〔東行^{とうぎょう}〕でした。彼は天保10年に長州藩士高杉小忠太〔家祿150石〕の長男として生まれました。松陰より9歳年少です。藩校明倫館に学びながらこれに満足せず、幼年時からの親友、久坂玄瑞の勧めで——父、祖父に秘して——松下村塾に入り〔安政4年〕、以後一貫して松陰に師事することになります。松陰の刑死までわずかに2年ですが、その間高杉は江戸に出て昌平黌に学び、松陰はそのあと萩の野山獄から江戸伝馬獄に送られて、両人の交わりはひとしお深まっています。高杉は萩にある久坂に宛てて「……心中には僕はとても及ばぬこれ頼むべき人と思ひ、兄弟の盟をも致したくと……思い居り候えども、これまで遂に口外仕らず居り候」と申し送るとともに「僕もこの節は学問の面目を大いに變じ申し候。……何とぞ御国の兵制相立ち候ようと勉強仕り居り候……」と近況を伝えつつ、「松下先生、〔野山〕獄にて如何の状態か……、日夜思い出し落涙仕り候」と申し送っています。実際、松陰の「脱囚」のためにずい分努力もしたのです。他方、松陰は江戸に遊学したこの弟子を獄中から佐々間象山に紹介してこう言っています——「高杉生、僕より少きこと十年、学問未だ充たず、経歴亦浅し、然れども強質精識、凡倫に卓越す。常に僕を視て師の如くし、而して僕亦之れを重んじて兄と為す。……願はくは僕に語るものを以て此の生に語られよ。……」。だが、問題がないわけではありません。「暢夫〔高杉晋作〕、識見気魄、他人及ぶなし。但だ一暢夫を得て之れに抗せしむるに非ずんば必ず害を生ぜん。然れども兩暢夫相抗すれば、必ず一暢夫の斃^{たお}るる者あらん。是れ亦憂ふべきなり。此の間の苦心、吾れ桂〔小五郎〕と一言せしに、桂も之れを首肯せり」と言っています。良くも悪くもあまりに独裁的な性格だということです。桂はこれを聞いて、それがわかっているならいま一言忠告してやったらよいのではないかと思います。これに対して松陰は「しかし、僕もまたこれを思う。但し……暢夫後必ず成るあるなり。今みだりにその頑質を矯めば、人とならざらん。……他年なるあらば、たとえ人の言を容れずとも、必ずその言を棄てざらん。十年の後、僕或いは為すあらば、必ずこれを暢夫に謀らん、必ず吾に^し負かじ。……」と応じています。

ここで注目には値するのは彼が「暢夫十年遊方を期す、……その為す所に任せんと期す……」とも言って、社会の変革が現実の日程にのぼるだろう日をかなり先にみていることです。これ

は安政6年2月、再入獄後のものですが、前年未、問部老中要撃を策した直後の時点でも「今日天下の事、実に空言にては行なわれ申さず。幸いに十年後まで僕も老兄も無事に存在致し候わば、その節は対晤の上、きっと大計商議致すべく候えども、それまでは各地にて所見のまま取り行ない申すべし。……」と高杉に書き送っています。松陰の言行が「利」＝‘変革の成否’を尺度とするのではなく、「大義」＝‘正義の士として行うべきこと’を実地に示すことにあったことがわかるのですが、それと同時に、幕藩体制の崩壊は必至であったとはいえ、幕府のたび重なる失政がなければまだしばらくは持ちこたえうるだろうという見通しは松陰さえ否定しえなかったことが物語られているといえましょう。

- (2) 高杉の江戸での勉学の様子にもまだゆとりがあり、師、松陰の伝馬獄への収監後も事態が切迫したとみてはいなかったようです。松陰自身も一時は「御吟味の模様にては輕典に処せられる事と察せられ候……」とか「遠島は免れず」という予想をたてたほどでしたが、井伊ははじめから死罪と決めてかかっていたのですから、見通しは甘かったのです。門弟にできたことは、獄役人に賂金〔わいろ〕^{まいない}を使って師の死骸を手に入れ、自分たちの手で埋葬することだけでした。といっても晋作はその直前に萩に戻っていたので、これを実行したのは江戸にあった桂ら4名だけだったのです。この一報をうけて高杉は「承り候ところ、我が師松陰の首、遂に幕吏の手にかけ候の由、防長の恥辱口外仕り候も汗顔の至りにござ候。実に私共も師弟の交わりを結び候程の事故、仇を報い候らわで安心仕らず候。……これよりは、屈してますます盛んの語を学び、朝撃劍、夕べ読書、練磨赤心、堅固筋骨、孝を父母に尽し、忠を君に奉じ候えば、すなわち、我が師の仇を討ち候本領にも相成り候らわんか……」と藩政府要人〔周布政之助〕に書き送っています。彼はすでに幕府にあいそをつかしていたのですが、はっきりとこれを仇敵と位置づけたのはこの時だったと思えます。上の手紙は「明〔11月〕二十七日は吾が師初命日故、松下塾へ〔久坂〕玄瑞と相会し、吾が師の文章なりとも読み候らわんと約し候位の事にござ候」と続いています。松陰門下の3傑の心のなかで、‘尊皇’は即‘討幕’となったのです。

高杉は松陰の死ぬ3カ月ほど前、「僕、今日如何して可ならん」と自らの生き方の指針を求めています。それへの答えは極めて具体的でした。「先ず、遊学済ましなされ候わば、畜妻就官等の事、ひたすら父母の御心に任せられ、もし君側にては御出でなれば、深く精忠を尽し、君心を得るべし。しかる後、正論正義を主張すべし。このとき必ず禍敗を取るなり。禍敗の後、人を謝し、学を修め、一箇恬退^{てんたい}の人となり玉わば、十年の後、必ず大忠を立つるの日あらん。ごくごく不幸にても一不朽人となるべし」。松陰の弟子に対する評価はほとんどの場合極めて的確だったのですが、それにしてもここまで正確に高杉のこの後の人生を予言してたことは一驚に値するといつてよいでしょう。もっとも高杉もこの助言を深く心に留めて自らを律したのもあったのでしょう。

- (3) 高杉は帰萩後、明倫館舎長〔→都講〕となり、航海術修業にわずかに手をそめたあと、加藤有隣、佐久間象山、横井小楠を訪ねて議論を交し、文久1年3月、毛利藩世子〔毛利元徳〕の

小姓役に挙げられ、藩公〔毛利敬親〕父子に親近する地位を得、更に同年末世子の命により中国上海を訪問することになりました。「若公某に命じて曰く、幕府吏をして支那諸港に互市すと聞く、汝幕吏に随ひ、ひそかに支那諸港に渡り、彼の形勢情実と彼の諸夷を御する所以とを探索せよ、……」というのでした。「此の行〔計51人〕、幕支那へ渡り貿易を為さんと欲す、寛永以前の朱章船未だかつてこれ有らざる事」なものでしたが、何か長期的目論見があつてのことではなく、長崎商人たちが長崎奉行高橋美作守——「聞く、高橋は……頗る俗物也と」——に賄賂を遣つて私利を得ようと考えたところから計画されたものでした。「江戸〔より〕来りし官吏も、多くは高橋党に而、皆俗物故、……互市之事、商人及長崎地役人に任せ置き、何も知らず、唯商人共書上之記録日記する而已也、……」といった有様でした。しかし高杉はこの上海行で極めて多くのものを得ました。

- (イ) まず第1に中国の実状の確認です。「上海は蘇州松江府の上海県にて滬城と云う城あり、……城の内外、家戸十万余、津港も至つて繁盛の事にて、外国船碇泊する事、常に二百艘の上に出ずると云う。……しかるに、この繁盛たる所以も、畢竟、外国人の繁盛をなすのみにて、支那人ただ外国人に使役せらるるのみなり。外国人中英仏二国を以て最となす。……」一口に言えば「上海形勢、大英属国と謂ふ而も好き訳なり。」更に上海に攻め入ってくる「長髮賊」〔明人の後裔〕を自力では防げず、「敵とするところの外国人に援兵を請い、おのが領地の賞罰も外国人に専らにせられ、港の税金も外国人に取り取めらるる等の事、……実に廉恥拙地言語に堪えざるなり。」「我神州ニモ早く謀ヲ為サスハ、遂ニ支那ノ覆轍ヲ踏モ計リ難シト思フ……」。

なお、英仏両国の力については、長崎でのロウレイロ〔「仏蘭ス、ポルトガル両国のコンシル」〕との対話で「仏蘭スは陸地多し、故に土分甚多し、又軍艦を作らすんはならず、故に両方について多く、甚だ窮す。英国は四面海を受く、故に陸軍少くなく、因て土分甚少し、只た大軍艦を多山に作る、……元来西洋には軍艦多きを以て強国とす、……故に世界中英国をもつて強国となす……」と説明を受けています。

- (ロ) こうした状況を知って、高杉は更に「先日より和夷互市商法などの事探索仕り候ところ、いわゆる商売の穴も知れ、だんだん御国益にも相成る事か」と上海を拠点とする貿易策を提案しました；——「弟策大綱のところ申し候えば、まず当地海辺の地面空しき所を買い上げ、大阪の御蔵敷の気味にて、蔵の五六も建ておき、御国より船廻しの品物何に寄らず蔵に積み込み、……地歩を占めて罷りおり候えば、いづれ品物品物にて、一月に相場の高下はこれ有る物につき、相場よろしき時節を見込み、夷人と直談にて御売払いこれあり候えば、御利益これ有る事か……追々公儀より外国へ渡海通商差し免じられ候節、ここもとを根会所にして、……広東、定海、香港、あるいは英の倫頓^{ロンドン}、米の華新頓^{ワシントン}とても致らせ、便理よろしきと存じ候。……実に勤国と申しても富国強兵の事にござ候。強兵は則ち富国のことなり。……勤国勤国勤国と大声にて慷慨のみ致され候は、すみじきことと存じ候、……」というのです。明日にはこの方針で動き出そうと彼は進言しているのですが、しかし、藩当局はそう決断する能力も気力もなかつ

たのでした。

- (ハ) なおここですぐさま役に立ったのではありませんが、彼がのちに「奇兵隊」の組織を着想した際に参考になったと思われる議論があります。これも上海行の準備のための出港地長崎ですが、アメリカの「耶蘇教師」の1人、ムリヤムスとの問答です。「予問曰、日本は士官与土民相分る、貴国は如何ん、ムリヤムス曰、我国土民相分ることなし、国王となりても、亦土民〔に〕帰る者在り、土民より国王〔統領〕と為る者あり、即ち合衆国元祖^{ワシントン}親頓者、始め土民、遂に大統領、後又帰土民、又再び為国王、是れ手近き証古、我更に士官土民相分るゝこと無きなり、……」というのです。‘士 vs 農工商’という身分制度が絶対的なものでないことをはっきり意識することが出来たのはこの時だったのです。
- (4) 高杉が上海行から得た知見は、しかし、彼にとってすべてが新しいわけではありません。そのなかでも、彼が久坂に宛てた手紙〔安政6年8月〕のなかで、すでに次のように語っていたことがあります。「僕この節の議論御尋ね故申し上げ候。……もとより天朝に御忠節幕府を御助けなされ候が国是建つ本源と〔御前講仕り候〕節〕講じ候がまたこの節相考え候に中々御国〔＝長州藩〕の勢にてはかくの如き事は出来かね、それ故我一身にて致すより手段これなく、一身にて致す時は大軍艦に乗り込み五大洲を互易するより外なし。それ故、僕も近日より志を変じ軍艦の乗り方、天文地理の術に志し、早速軍艦製造場処に入り込み候わんと着き仕り居り候。……」。松陰の場合もそうでしたが、‘攘夷’は鎖国の維持ではなく、積極的に国際貿易を展開することと一体をなしていたのです。

ともあれ、高杉が帰国してみると、国内の情勢は大きく変わっていました。と言っても、前々年の井伊大老の暗殺・皇妹和宮の降嫁公布以降、朝幕の融和の気運がかもし出されるなかで、長州藩は尊攘を唱えて政局の主導権をとろうと京都に出、朝廷・幕府・諸藩藩の協調体制構築に乗り出していました。毛利藩主は側近の策士、長井雅楽の「航海遠略策」を政策的含意の戦略大綱として公武双方に説きまわらせたのですが、高杉は当初からこれに反対でした。のちに振り返ってこう言っています。「初め長雅御周旋を企て候みぎり、榑崎〔弥八郎〕・久坂〔玄瑞〕などへも相談仕り、天下の事はともかくも、この度御周旋の一条は必ず御国の大害を引き出し候につき、榑久両氏は天下の為に尽さるべし、我は国害を除かんとて亡命の殉義を仕り候……」。「江戸出足のみぎりも〔人〕払いにて、儲君〔毛利元徳〕へ御周旋の大害たる事を述べ、長雅の姦たる所以を諫言し奉り候……」。ところが、上海よりの「帰後上京仕り候ところ、——〔藩内の尊攘急進派の批判が勃興し〕——長雅はすでに退かれ候えども〔→文久3年2月自刃〕、御周旋はますます盛んに相成り、……沈黙苦思、ついに決意仕り候」と藩の方針に強く反対して「亡命」行動に出たのでした。「儲君へ御周旋はいよいよ防長〔周防・長門：＝長州〕を御抛げ遊ばされ候て御尽力遊ばされ候事なれば、断然幕府の罪御糺明これあり、御一戦もこれなく候ては、とても目途これなく候。然るところ唯今の勢にて万国諸侯ことごとく望観。御一家のみさよう御苦心御尽力……遊ばされ候てもその目途やはりこれなき事につき、天朝へ、長州一国にてはとても天下一致、尊攘の御周旋は、微力故相遂げがにきにつき、……御免願ひ

奉り候〔とお断りして〕……早々御周旋御手切遊ばされ、御両殿様〔毛利敬親・元徳父子〕ともに御帰国遊ばされ、御國中一致富強の御政事これありたく候……』というのがその要旨です。しかしこの忠言は聞き容れられず、「天下の人……の悪口は長州には、始は航海論を唱え、今日に至っては切迫の攘夷論も唱え候段、不信の至り、これ定めて天朝へおもねり、天下を惑乱するの術なりと』いうのでした。この「悪口」は全く根拠のないものではありません。さきに松陰が「吾が公已に尊攘に志あり」と言っているように、毛利敬親に早くから尊皇の志があったことは事実でしょう。が、それをどのような新体制と構想するかという政治のリアリティは欠けています。すでに安政年間に「公武合体」という形でこれに先鞭をつけながら藩主島津成彬の急死によって挫折を経験している薩摩藩ひとつを考えるだけでも、ここで長州が一気にリーダーシップをとるといったことは難しい、いまはそれだけの力がないことを自覚し、国へ帰って自藩の「富国強兵」にまず力を注ぐべきだという高杉の考えは妥当だったと思われます。しかし「その後御帰国もこれなく、ますます御周旋論盛んに相成り……』というように事態は進行し、高杉はこれを「決心未だつかぬのに勤王と申し唱え、……虚動これあるの義は、功名勤王にて真の勤王にはこれなき事」と非難するのですが、どうにもなりません。彼がこの年の末、「御楯組」11名を組織し、イギリス公使暗殺を計画して元徳に押し止められ、わずかに横浜に建築中の公使館を焼打ちするという行動に出た〔文久2年12月〕のは、長州人の攘夷が口先だけのものではないことを示そうとしたのだというのですが、その是非はともあれ、この年10月朝廷から攘夷の勅旨が出され、幕府は遵奉を表明したということがあって、「攘夷」を口にすれば何でも許されるという空気が支配的になっていたのでした。事実また、本来ならば重罪とされておかしくない彼らの行動は罰せられずに済んでいます。そして翌文久3年幕府が上奏した5月10日の攘夷期限に合せて長州藩だけが下関海峡を通航する米船を砲撃、翌月米仏英蘭4国軍艦の報復攻撃を受けて敗れることになりました。高杉はこの間「十ケ年間御暇被差免……』ということで帰国隠遁中でこの拳に「大不同意」だったのですが、急遽呼び出され、「御両殿様〔より〕……馬関防禦丸々委任〔の〕……御直命』によって現地にかけつけました。全く新しい編成原理の「奇兵隊」を組織したのはこの時です。

- (5) この奇兵隊は「有志の者相集り候」もので、「陪臣・雑卒・藩士を選ばず、同様に相交り、もっぱら力量をば貴心、堅固の隊相調え申すべし」という考えで編成され、そのうちには「これまで〔正規の〕小銃隊の内〔にあったもの〕もこれあり、又は〔藩の〕小吏相勤め候もこれあり候えども、畢竟匹夫を志奪うべからず……自然奇兵隊望み参り候わば、隊中人相加え申すべし」とされ、「隊法の儀は和流西洋流に拘らず、おのおの得物を以って接戦仕り候事」と決められたのです〔文久3年6月〕。これは当時の武家社会では誰一人として考え及ばない着想でした。高杉もそれがわかっていますから、藩政府に対しては、現地の軍は「惣奉行の指揮」下であって、自ら直接に動かさうる戦力がないので、「……好みて異外に出て候わけにはござなく……やむをえざるの窮策にござ候……』と弁明していますが、その実は、「〔藩公直参の藩士で編成している〕八組の士畏縮し、この体なれば一両月の中又々夷艦襲来すれば防長は塵と

なると考え、ついに奇兵隊を興し候」と、上からの命令で義務的に編成されている既成の軍隊では戦えない、幕兵に応じて自発的に集まった新しい質の軍団が必要だと考えたのです。この年のはじめ、上海渡航の途上でアメリカ人、ムリヤムスから聞いた「士官土民相分るること無き」社会のイメージが高杉のなかに残っていたのだと思えます。この奇兵隊は現場でも既在の隊と紛争を起したりして、彼はその直接の指揮官の地位を他に譲ることになりますが、これ以降長州藩の軍事組織は奇兵隊にならって各地で思い思いに編成された「諸隊」をユニットとし、それらの「総管」が集って「会議所」で戦略・戦術を決定し執行する体制になってゆきます。このあと藩政府を建て直し、最終的に幕軍を撃退する体制がこの時生み出されたのです。

- (6) しかしこれはさしあたりは藩レベルでの変化の胎動で、中央進出の方針は改まりません。その結果が文久3年8月の宮廷内でのクー・デター、いわゆる「8月18日の改変」でした。長州主導の急進的な尊攘に敵意を抱いてきた薩摩・会津らの親幕諸藩が朝廷内の公式合体派と組んで、長州藩を宮門警護から解任し、あわせて三条実美らをも追放し、いわゆる「七卿落ち」という事態になったのでした。不幸にも高杉の心配が現実となったのです。藩政府は彼を知行高160石、奥番頭役に取立ててこの事態に対応しようとした〔文久3年10月〕。しかし、この京師での事態一変で藩内は「老練先生は因循に陥り、勇豪の士は血気に流れ、議論一統仕らず」一方で守旧の立場をとろうとする「俗論」党が頭をもたげるとともに、尊攘派のうちにも意見の分裂が顕在化しました。急進派「遊撃軍」のリーダー来島又兵衛や年来の盟友久坂玄瑞らが京師への「進発」を主張するのに対して、高杉は逆に藩主の上京を押し止めようとかねてからの「割拠」策を主張して対立し、来島の説得に失敗して孤立した高杉は「独立独行」を宣言して「再亡命」します。そして彼のそうした行動が「君命を待たず、妄意に脱走……全く以て我侪の所行」として知行没収、野山獄へ収監となり〔元治1年3～6月〕、その直後事態は「禁門の変」〔7月〕〔失地回復を目ざした急進派主導の京師への進軍と敗北：来島・久坂らの戦死〕、「馬関大戦争」〔8月〕〔4国連合艦隊の下関攻撃〕へ突き進むこととなります。ここで晋作はまた藩主に呼び出され、「其方は迄之罪丸々御免……御政務座被仰付……」と藩政府の中枢に上げられ、連語諸国との和議応接掛りに任命されるのですが、それが結着するとともに藩内は「俗論」党の支配するところとなり、「御役御免」、一身にも危険がせまって、「再三の脱走」に立ち至ります。他方幕府は「禁門の変」を口実に長州藩主追討の勅命を得て〔7月〕、——毛利父子の官位剥奪〔8月〕——諸藩に長州征伐を命じ〔8月〕、長州藩は全面的にこれに屈することになります〔11月〕〔藩主父子蟄居、尊攘派3家老切腹、4参謀斬首〕。ここに至って高杉は藩を立て直すべく、下関を起点に挙兵〔12月〕に踏み切ったのでした。「御両殿様御先祖洞春公〔毛利元就〕の御意志を継がせられ、正義御遵守遊ばされ候ところ、姦吏どもその趣意に相背き、名は御恭順に托し、その実は畏縮偷安^{とうあん}の心より……四境の敵に媚び、〔征長軍の要求を容れて〕ほしいままに閔門^{こぼ}を毀ち、〔藩主の〕御屋形を破りあまつさえ正義の士を幽殺し、……御両殿様の御身上に相迫り候次第、……言語道断、我等世々君恩に沐浴し、奸党と義においてともに天を戴かず……」との「討奸激」〔慶応1年1月2日〕が奇兵隊をは

じめとする諸隊にむけて発出され、わずか半月のうちに藩政は尊攘派の手に取り戻されました。

高杉はその直後『回復私議』〔同年1月23日〕を執筆し、「京師敗走」「馬関和議」以来の経過の処置、この「回復」以降にほどこすべき諸施策の大綱を論じていますが、奇妙なことに、これは‘高杉政権’の施政方針の提示ではなく、「……余は同志中にてもっとも国罪を得しものなれば、国に止まるとも、かえって同志の煩を招く懼あれば、あえて同志に告げずして去る。」この「一篇の回復私議は同志に対し交議を忘れざるの微心なり。」という政局からの引退の表明なのでした。だが、その点はひとまず措いて、今後の策として提言されたところをかいつまんで示すことにします。

(イ) 賞罰——〔支藩〕「長州、清末両公の御正義御賞美」,「徳山公の大罪、〔幕府に通じた〕岩国の大悪逆御糺明」,「馬関戦争……京師の戦争……討死戦功急に御賞美」,「諸郡の御圍米を土民に御恵み……苦勞を……御賞美」。

(ロ) 兵制——「今日幸いに干城隊起り、諸隊の上に立ち、回復の御実行成就せしなれば……干城隊中八組の士五六十名……諸隊の標となる時は、諸隊のものも平城隊の指揮を受け国のために尽忠するなるべし。干城隊の総督は……指揮号令の出来る人物を選ぶべきなり。……干城隊を御城下におき、……大指揮、大規律は干城隊の総督、政府の命をうけ、会議所にて諸隊の総督と談決の上、隊々へ号令すべし、臨機の処置は隊々の総督に任すべし。……」

(ハ) 経済——「一日も速かに良縣令を郡々へ相定め、農は農をもっぱらになさしめ、商は商をもっぱらになさしむべし、……米銀方の役人すみやかに山口に來り、諸隊総督と談決の上、米銀の取り始末をつくる事急務なり。当時、浪花は御手切れに相なりても、馬関の良港あれば、御米銀御繰巻きはいかようにもできるべし……」

(ニ) 「御両殿様の御冤罪、……旧の如く防長兩藩の太守とならせられ」るよう筑前・備前・因州の各藩を介して「歎願」。

(ホ) 「幕府薩会」との「和戦」の展望——「……幕府ふたたび追討の兵を起し四境を力まん。この時こそ、断然大割抛の方略を定め、蒸気軍艦一艘を求め馬関に繋ぎおけば、九州口は恐るるに足らざるなり。芸州口、石州口へ諸隊を屯集防禦せしむる時は、百戦百勝の利あること必然なり。兩三戦もなし、三四月も保つ時は、他方より和議の説起こるべし。……この度、四境の兵は幕薩会にして官軍にあらざることを論ずべし。考うるに、幕府ふたたび追討の兵を下すとも、諸侯中奉命者かならず少なからん。……内には富強日新の政を行ない、外、兵威を以って敵に示す時は四境の兵畏縮、御歎願相調う事、鏡を懸けて見るが如きなり。……たとえよくよく武運につき、大敗北に至るとも、馬関の良港を奪われねば、回復の策は山の如くあるべし。……馬関開港の議、……国体を恥かしめざるよう我より先んじて開港すべし。

民政正しければ、すなわち民富む。民富めば、すなわち国富み、すなわち良機械も手に応じて求めらるべし、諸隊の壮士にミネールの元込み、^{ライ}雷フル、カノンの野戦砲を持たしむるときは、天下に敵なし。……国外へ手を出すようなる事は無益の至りなり。国富み、兵強ければ、御両殿様尊攘の御意志は御獨立にて御遂げ遊ばさるべきなり。」

(7) このように長州藩の施政全般に目を配りながらも、高杉が藩政を主導する地位を望まず、「この後の処、老兄〔桂?〕方へ丸々御頼み申さずとはならぬ……」と判断したのは何故か、確かなところは判りませんが、しばらくして萩在住の父あての書信に「……萩城は仰せこされ候通り、俗家の藪叢、これに加えて当時は正義家々迄に、流派これあり、中々一歩も軽挙相成りがたく、嫌疑多き世の中、……」とあるように、今となっては正面切って高杉に反対することはしないまでも藩主の近くにはまだ「俗論党」の人々が健在で、かつて「本藩上下の礼においては古今これなき事」といった理由で彼を入牢にまで追い込んだやり方で、彼の再度の失脚がねられる危険があったと思われます。また‘尊攘派’のなかでも彼の「割拠論」はもともと少数派だったということがあります。「ともかく両国を五大州中第一の強富国にす」ることが当面の眼目で、「雙眼四足兩國〔防長＝薩〕中に在り候と尻目にて天下の形勢を窺う位にてちょうどよろしきか……」という彼の長期戦略は同志のなかでも支持され難いこともわかっていたのではないのでしょうか。

(8) ともあれ高杉はここで「一日も早く沈滅の人と相成りたく……」と、「ひそかに」英国行きを企てます。「馬関もいづれ開港に相ならん」ということを見越してのことです。そしてこれは藩も認めるところとなり、伊藤春輔〔→博文〕を同伴して長崎まで出のですが、ここでグラバと相談するうち、「馬関開港」がより緊急の策ではないかと思い直し、英国留学を若い者たちに譲って馬関に引き返すことになりました。しかし、馬関開港は、萩の本藩と長府・清末支藩との間の替地をめぐる紛糾し、結局実現しません。そこで高杉は「四境より外賊の迫り」くることを予期して、堅艦利器入手のため井上・伊藤を長崎に送り、国内で兵制改革に奔走することになります。そして結局藩政に復帰するようになってゆくのでした〔「御用所役」, 「蔵元役兼帯」, 「海軍興隆用掛兼帯」〔慶応1年9月〕……〕。

幕府はこの間、第2次長州征伐を諸藩に発令〔慶応1年4月〕、ついでその勅許をうる〔9月〕ところまでこぎつけましたが、1年経っても事態は膠着状態のままです。長州の側からみても同様です。高杉はこれを「攘夷も真の攘夷は出来ず、和親も真の和親交易は出来ず、これ我が州方今自然の勢……我が邦独り攘夷、万の諸侯中一人の応者なし、我ひとり断然真の開港を始む。……防長〔公称36万石、実収高〕百万石なり。名義を論ずる者あり、遠謀を策する者あり、議論ついに一致せず、……懼るべく、憂うべし。今日の事は天然自然の勢に任す外、良謀奇策もこれなき儀を存じ奉り候。六十州中、土崩瓦解に立ち至るまで待たざれば……何とも手段これなきよう愚按し奉り候。……」と憂えています。

この手づまりを一気に解消し、自身を「土崩瓦解」に追いやったのが慶応2年6月の幕府の第2次長州攻撃開始でした。多少とも冷静な思考を働かせれば、これが途方もない愚行であることは誰にもわかったでしょう。第1に大義名分が立ちません。第1次長州征伐には、長州藩が京師に攻め入って、御所のうちまで戦場にまき込んだという失策がありました。しかし長州はこれを悔悟し、3家老以下の斬罪などをもって朝意遵奉の実を示し、一戦も交えずに征長軍の解兵となって結着がついています。いまになってその処置が寛大にすぎたというのは理屈に

なりません。そのあと、長州藩政府で‘恭順派’＝「俗論党」が‘尊攘派’＝「正義党」にとって代られるという新事態が発生したことは事実ですが、この長州新政府が、内心では‘討幕’を目指しているには違いないのですが、それを言葉に出してそう言っているわけではありません。これを戦争の理由にするなら、徳川家と毛利家の私闘ということになってしまいます。実際、譜代大名や旗本はともかく、幕政に全く発言権を認められていない外様の諸藩にとっては大迷惑以外ではありません。しかし問題はそればかりではなく、幕府の愚かさは、幕府に反対する勢力はもはや長州だけではなくてという政局の現実を認識する能力を失っていることを自覚できないところにありました。すでに慶応2年1月には西郷隆盛と桂小五郎とを代表とする‘薩長連合’が土佐の坂本龍馬の仲介で成立し、倒幕・王政復古を目指す軍事同盟が協定されていたのです。幕府はそれを知らずに、薩摩藩にも出兵を命じますが、このたびの再征は「天理にもとる戦さである」ときっぱり断られる破目になりました〔慶応2年4月〕。最大・最強の薩藩が加わらないというのですから、その他の諸藩も……ということになり、戦意は喪失せざるをえません。しかし、幕府としてはもうあとには引けません。慶応2年6月7日戦端は切っておとされました。戦場となったのは、大島口、芸州口〔広島〕、石州口〔山陰〕、小倉口〔馬関口〕の4個所だったので、長州側はこれを「四境戦」と呼んだのですが、主戦場は小倉口と石州口で、長州軍はそれぞれ高杉晋作と大村益次郎がひきいる自発的に組織された奇兵隊以下の「諸隊」が新たに仕入れた西洋の新式銃で武装していたのですから、寄せ集めの幕府軍に勝ち目はありませんでした。

高杉は海軍総督に任命され、自ら指揮官となって門司に渡り、九州口幕軍総督小笠原長行（老中格）の指揮する小倉城を攻めて遂にこれを焼き払い〔6月17日～8月1日〕、勝敗の帰趨は明らかになりました。この戦いで高杉は、まず攻撃のはじめに九州の諸藩に書を送って、幕軍の行為は「皆堂々たる官軍の所業にあらずして姦吏の陰謀なる事……これによって止むをえず義兵を挙げ」たのであって、「全く貴国の境界を犯略するにあらず、……」と弁明し、戦争差図書では、「当〔小倉城〕攻口の謀略」として「戦わずして人の兵を屈するの兵術」〔『孫子』〕を用いて城を包囲し、更に「田浦；文字〔門司〕その他浦々へ廻り土民困窮の者へ救い米等を渡し、漢高〔劉邦〕漢中に入りし時の如く人望を得るの策をなすべし、……」と指示しています。

幕府の面目はまる潰れになるところでした。しかしこの最中の7月、たまたま將軍家茂が大坂城中で脚気衝心^{かっけ}で突然死し、その喪に服すことを口実に一方向的に征長軍を解兵する命令を下してかろうじて体裁をつけたのでした〔慶応2年8月〕。といっても相手のあることですから、長州側にも休戦を説得する必要があります。第15代將軍となった徳川慶喜は勝海舟を内密の使者として送り出し、芸州の宮島で長州の広沢兵助〔真臣〕らと会談した勝は和議の合意をとりつけて帰ったのですが〔9月〕、その間に慶喜は心変わりし、朝廷に願い出て得た勅諭は「……暫時兵事を見合せよ……」ということではかないと言い張って、形の上では以後も対長州戦争は続行ということになりました。しかし、実際の戦争は終わっているので、長州には何の

処罰も加えないで幕を引くというぶざまな結末になったのです。ですから、ここでもう幕府の命令に従おうという藩はほとんどなくなりました。幕府の命運は、実質的にはここで尽きたのです。しかしそうではあっても、幕閣に何の目算もなかったわけではありません。それはフランスの全面的バックアップを受け入れて、いま一度態勢の立て直しをはかるという途です。フランス公使レオン・ロッシュは、必要なだけの資金の調達仲介をとることや、幕軍の大革新に手を借すための軍事教師団の派遣などを約束し、これをもって長州をたおし、次いで薩州をも撃って、徳川家の主導する中央集権的郡県制に進むべしと熱心に助言することになっていたのです。しかし、このプランは2～3年先の成就を予想したもので、時局の進展に間に合いませんでした。慶応3年に入ると薩摩藩も公然と討幕方針に踏み切り、「王政復古」以外に道はないという空気が国内にみなぎってくるのです。

- (9) ここで話しを高杉晋作に戻します。病魔が彼をおそったのです。小倉城の攻略が終りかかった慶応2年7月頃から体調の不良を自覚しはじめ、9月はじめには血痰を見、戦勝の最終局面を病床で聞くことになり、以後療養のかいなく、慶応3年4月13日死去しました。享年29歳、師の吉田松陰よりなお1歳若くしてこの世を去ったのでした。高杉の死が避けられないという事態になったとき、藩は改めて彼 [= 「谷潜蔵（藩主の命名）」] に「新規召し出され〔知行〕高百石下し置かれ……候事」との「沙汰書」〔慶応3年3月29日〕を下付して、ようやく父「高杉小忠太^{はぐくみ} 劫」という従属的身分から解放し、その死とともにこの新しい地位を「実子梅之進〔に〕相続仰せ付け」としました。藩公の追悼令文に「右〔谷〕潜蔵事抜群の人材にて御奥所勤御用所役等多年廉ある御役相勤の、尚又攘夷戦以後止戦談判を初め、内外共に難渋の御用筋諸事都合よく取り計い、殊に去夏戦争〔‘第2次対幕府戦争’〕先御勝利の姿に相成り候も畢竟御高運の致す所にこれあり候えども、潜蔵事別して苦心せしめ尽力——形ならぬ儀にもこれあり、……きっと御用相立つべき者にて往々御たのもしく思し召し候ところ、この度死去せしめ御残念に思し召され候。……」とあります。これが高杉の功労に対する長州藩の最終的な評価であったといえましょう。
- (10) 高杉晋作に焦点をあてて見た長州藩の‘維新’へむけての動きはおおよそ以上のようなものです。明治維新の構造をみるにはなお、次にみる薩摩藩の動向に注目しなければなりません。この始めから「尊攘」を大義としてたてたのは長州のみですから、維新の性格は主としてこの藩の言行から読みとってよいのです。形の上からいえば、この政治革命は2つの封建的領主、徳川家と毛利家の権力争いでした。この確執の発端は遠く2世紀半前の‘関ヶ原の戦い’に遡ります。ここで豊臣方に加わった毛利家は戦後、——それまで安芸・周防を中心にして10余カ国、120万余石を領有していたのですが——周防・長門2国の36万9000石に減封されてしまったのです。同じく‘外様’となった薩摩77万石がそのまま保持を許されたのと比べてみても、あまりに苛酷であるというわけで、長州の徳川幕府への対応はずっと‘面従腹背’だったのです。「尊王」という言葉は誰もが口にしていたのですが、例えば‘ご三家’の1つ、水戸藩のそれとはその実質が異なっていたのです。長州は潜在的にはじめから「尊王」＝「反幕」だったわ

けで、それが安政通商条約勅許問題をきっかけに顕在化し、吉田松陰の斬首を境に高杉晋作の心に「討幕」の2字を刻みつけたのです。

しかしこの頃までは「尊王」はひとつの抽象的観念にすぎませんでした。ところが、長・幕いずれも自己の行為の正当性を裏付ける一般的權威オーソリティをもっていません。徳川家にはその初祖、家康＝「東照大権現」——〈仏〉〔御正体〕のこの世の化身としての〈神〉——が創り出されていますが、毛利家にとっては、かつて戦国大名として君臨した——高杉のいう「先公」——毛利元就〔洞春公〕がよりどころです。諸領国の編成原理が〈家〉なのですから、ある「国」にとっての絶対的權威も他の「国」にとってはただの人でしかないのです。万人にとって絶対的な精神的權威としてゆるがない〈キリスト〉のような存在がないのです。見廻してみると〈天皇〉——これも実は〈家〉原理でつくられているのですが——だけが共通のオーソリティとして使える、ということになって、その存在がクローズアップされてきたのです。幕府がまずこれの利用に踏み切り、長州はこれを反幕→倒幕の道具としました。すべてのことが、勅許、勅諭、密勅、……なしには行なわれなくなり、政治的に無力な朝廷が自己の意志ではなく敵対する「勤王」「佐幕」の両者に担ぎ上げられる「祭の神輿みこし」になっていったのです。

高杉が倒幕行動に一貫性を保てたのは、そうした神輿かつぎのなかに埋没しないようにという生前の松陰の忠告を忘れなかったところにあるようです。「亡命」「脱走」を繰り返して、長井雅楽にはじまる京師への「進発」行動に強く反対し、長州藩内に止まって「富国強兵」をはかるべしという「割拠」論を展開したのはそれでした。これは幕府の征長軍をむかえ撃った「四境戦争」でも威力を発揮しました。『孫子』の兵法がいう、まず味方の守備を堅めて敵につけ入らせず、敵が攻撃を仕掛けてきたときその隙をとらえてこれを破るという基本的陣構えです。高杉の兵法が強く孫子に依拠するものであったことは、「兵は奇なり」という言葉にちなんで、彼の独創的な軍団を「奇兵隊」と名づけたことにも窺えるでしょう。ともあれ、高杉は「公武合体」などということは問題外とただけでなく、「薩長連合」さえ「薩も……追々親和の萌」しといった程度にしか評価しませんでした。要は長州藩を日本最強の藩に仕立てあげ、独力で幕府を倒すというのが彼の基本戦略だったのです。

- (11) 高杉の思想はといえば、彼が常々「先師」と呼んで崇めた松陰のそれを受け継いでいるといえますが——実際、彼は少し暇ができると松陰の遺稿を取り寄せて整理の仕事をしています——むろん個性はあります。兩人に共通する基本姿勢は「祖先せんぜんに孝こうする……父母ふぼに事つかふる」、せんぜんの忠ちゅうを墜おとしさず、父母ふぼの名なを忝はずかしめず」〔松陰〕というもので、〈孝〉をベースにして〈忠〉を考えるのですが、高杉は松陰と比べてもなお一層〈孝〉の原理を大切にしたようです。どこまでも藩主の言うところに従う保守的な父を「愚父」としながら、その父にかわらぬ孝養を尽そうとする彼と、自ら「狂暴頑愚傍若無人」と自称して思うままに行動する彼とは、極限的なコントラストをなしています。

しかし彼が〈孝〉を重んじるといっても、それは孔子や朱子のような儒家のそれではありません。上海に渡ったときの中国人との対話に「我国孔子聖人を尊ばざるに非ず。別に天照大神

ありて士民皆尊崇を奉ず、次で貴国の孔夫子に及ぶ。……人を教えるに忠孝の道を以ってし、天照大神と孔夫子と異なるところはない。……」と言っています。外国人への説明ですから、わかりやすく言ったのでしょうか、ともかく彼は日本的な‘神’観念に依拠しているのです。彼が繰り返し使う表現は、「天地鬼神」「先霊鬼神」「君父鬼神」……といったもので、〈鬼神〉がキーワードだと思えますが、そもそも〈鬼〉とは‘祀ってくれる子孫をもたないために浮かばれない先祖の霊’であり、〈神〉とは‘人知を超える能力をもつ霊の力’ですから、安住の地をえないでこの世から大きくは隔たらないところになお思い残すものをもって存在する靈魂、と理解してよいでしょう。その具体的なイメージとして彼が挙げる人物は2人います。1人は菅原道真です。幕府に屈した‘俗論党’を倒して‘尊攘派’の藩政府を「回復」すべく「挙兵」を決意したときの言明に、「国家〔＝長州藩〕大難胸中火の如く、……赤間関〔＝下関〕の鬼と相成り討死する落着にござ候」「……弟事は死んでも恐れながら天満宮の如く相成り、赤間関の鎮主と相成り候志にござ候」とあります。そしていま1人が山中鹿之助です。慶応2年4月の発言から引くと「……尼子〔藩〕の忠臣山中鹿之助、国難の日、五難七災に逢うを鬼神に祈ると云う。この豪胆鉄心古今無比、余常にこれを師と欽慕す」というのです。高杉は死んでのちもなお〈鬼神〉となって、長州藩のために尽すのをやめないという決意を表明したかったのです。‘尊攘派’政権を「回復」したとき、「今日の回復はすなわち、諸隊忠士のなすところにあらず。しこうして先霊鬼神の諸隊忠士をして回復なさしむる所以なり」と言ったのもこれだったのです。この〈鬼神〉信仰は素朴といえば素朴、通俗といえば通俗ですが、「独歩登天」を志す兵法家、高杉の気概の依りどころをなしていたのでした。中国の聖人、孔子が「鬼神は敬して、これを遠ざく」という正反対のコメントを遺していることが更めて思い出されるのではないのでしょうか。

3. 西郷隆盛〔1827-1877年〕

- (1) 明治維新の第1の立役者が高杉晋作であったとすれば、これに並ぶ第2の人物は西郷隆盛であったと言ってよいでしょう。松陰が待望した「草莽崛起の人」は2人現われたのです。しかしこの2人は何から何までと言って良い程対照的な性格の持ち主でした。ですが、この点についてはあとで見ることにして、取り敢えず確認しておきたいのは、西郷は高杉のようなラディカルな主張の持ち主ではなかったという点です。これはごく一般的には薩州人と長州人との体質の差と言えそうですが、直接的には西郷の人物を見込んで中央政界で活動する機会を与えてくれた薩摩藩主、島津成彬への敬愛が大きく働いています。成彬はペリー来航から始まった未曾有の国難に対処するための新しい国家体制として‘公武合体’を主張し、ようやく緊張の度を強めてきた朝・幕関係を取り持って、いわば挙国政体を実現しようとしたのです。しかし、藩内には彼の父、^{なりおき}齊興をはじめとする守旧派の力が強く、成彬の積極的な政治活動を心よく思わない。そして安政5年になっていよいよ兵を率いて京にのぼろうとした成彬はその直前に急

死するという事件が起きたのです。藩内では‘毒殺’か？という疑惑がひろくささやかれました。藩権力の実質的継承者、久光〔成彬の弟：新藩主は久光の子、^{ただあき}忠義〕と西郷との隠然たる確執はこのときからはじまったと考えられています。

西郷が‘尊王＝反幕’の立場をとるようになった契機は、高杉の場合と同じく、‘安政の大獄’でした。高杉は松陰を失って幕府を‘師の仇’とみなし、これ以降‘倒幕’を心に秘めることになるのですが、西郷は保護を委任された尊攘派の僧、月照の身を守り切れずに、投水心中未遂事件を引き起こしました。が、それでも直ちに幕府を見限るところまでは行きません。成彬の‘公武合体’路線はなおしばらく西郷のものでした。

- (2) この考えを変えさせたのは勝海舟です。彼は幕臣でありながら、日本人で初めてアメリカ社会をつぶさに実見した体験をもって、人々の‘勤王’‘佐幕’の対立を超えた日本国家の統一を展望するようになっていたのですが、西郷との初めての対談の際に、海舟自身が現に着手している海運建設の重要性と並べて、時勢の成り行きに関心をもっている有力諸藩が集り、統一的な対外政策を打ち出して事態の打開を計るという方策を語り出したのです〔元治1年9月〕。これは幕府をじかに倒すというわけではありませんが、とりあえずそれを棚上げしてしまって、軍事と外交を掌握する事実上の新しい共和政体をつくり出すという着想です。西郷が盟友、大久保利通に送った書簡〔天治1年9月〕はこれをこう伝えています；――

「勝氏へ初めて面会仕り候ところ、実に驚きいり候人物にて……頓と頭を下げ申し候。どれだけの智略これあるやしれぬ塩梅に見受け申し候。先ず英雄肌合の人にて、佐久間より事の出来候儀は、一尽も超え候わん。学問と見識においては、佐久間抜群の事に御座候えども、現事に候ては、この勝先生とひどくほれ申し候」

西郷の追求する政治路線はこのときから‘雄藩連合’による維新へと進展してゆきます。因みに、海舟の提示したこの路線のインパクトは、当時彼が神戸で開いていた海軍塾の1番弟子、坂本龍馬の頭脳を経て、やがて土佐藩の‘大政奉還’提案に成熟してゆくことになるのですが、そればかりではなく、‘江戸の無血開城’にむけての西郷と勝との合意も、二人の間の関係がただ人格的な信頼に止まらず、目指すべき政治変革の形態についてもこのとき基本的合意に達していたことによると思われるのです。

- (3) ともあれ、西郷は‘雄藩連合’の実現にむけて動きました。これが最初に具体的な形をとったのは世にいう‘薩長連合’の成立〔慶応2年1月〕です。もっとも、このアイデアを出したのは土佐から脱藩した坂本龍馬と中岡慎太郎でした。神戸海軍操練所の閉鎖の命で江戸に上げさせられることになった海舟の依頼で、坂本がしばらく京の薩摩邸に身を寄せていた時のことです。坂本は慶応1年5月に鹿児島で西郷と藩長連合の方針で動きはじめることを合意していますが、これは丁度幕府が‘長州再征’を決定して、将軍が江戸を発進したときと重なっています。西郷が幕府を最終的に見はなす――つまり‘倒幕’に向かう――と決めたのはこの時だったのでしょう。他方、中岡は長州に向かい、禁門の変以降このときまで潜伏してようやく藩に復帰した桂小五郎と合いました。これに坂本が加わって説得が続き、ようやく西郷＝

桂〔木戸〕会談——それは薩・長両藩主の承認を得てのものでした——のお膳立てができたのですが、西郷が將軍家茂と朝廷との駆け引きを見とどけるため京に急行したため、お流れになりました。家茂にとっては、上京の当初の目的である‘長州再征’の勅許をむりやり取り付けること〔慶応1年9月〕がまず問題でしたが、このときそれ以上に緊急となったのは、彼の上京を追いかけて英・仏・蘭3国の連合艦隊が大坂・兵庫港に来航して、かねて合意の条約履行、とりわけ朝廷が最後まで承認しないでいる兵庫の即時開港をせまったことへの対応です。西郷と大久保は、これらは重要問題であるから朝命によって有力諸大名を京都に集め、その合議をもってことを処理するよう諸公卿に説いてまわりましたが成功せず、他方、家茂は‘退隠して將軍職を辞するというジェスチャー’まで演じて、遂に兵庫開港の勅許を得たのでした〔同年10月〕。

西郷はここで雄藩会議の推進を一旦中断し、とりあえず‘薩長連合’工作に立ち戻ることとしました。木戸に上京を要請して伏見の薩藩邸で10日以上もこれを歓待し、両藩の不和を解くことにつとめ、最後にあらわれた竜馬が兩人をとりもって、6カ条合意書がつくられ、‘薩長連合’が成立したのです〔慶応2年1月〕。

幕府はこれを探知しえないまま、薩摩にも出兵を命じ、はっきりと断られることになりました。前々から陰に陽に‘再討’に反対だった諸藩はこれによって、さまざまな口実で出兵に応じない態度をとりうる事態となったのですが、いま更後へは引けない幕府は6月7日遂に戦端をひらくこととなります。その結果が‘四境’各地での連敗だったことはさきに見た通りです。偶々このとき將軍、家茂が急死し〔7月20日、公表は8月20日〕、その喪に服するために〔一時〕解兵すると称して敗戦を糊塗したのですが、更に孝明天皇も崩御して〔12月25日〕、御大喪によって‘征長解兵’の朝命を受けたという名目でこの不名誉な戦争の局を結ぶことになったのでした。

- (4) 幕府はここで軍事的にも全く権威を失ったのですが、翌慶応3年1月9日皇子睦仁親王が踐祚し〔→明治天皇〕、‘公武合体’一筋の孝明天皇の路線にゆらぎが生じ、これを機に幕閣も倒幕派も更めて自己の立場を強化する方策を模索することになります。西郷・大久保らが今度こそと実現を期したのがかねてからの‘雄藩連合’でした。薩摩〔島津久光〕、越前〔松平春嶽〕、土佐〔山内容堂〕、宇和島〔伊達宗城^{むねなり}〕の4侯が京に上って開いた会議がそれでした〔慶応3年4～5月〕。ここで問題とされたのは、一口に言えば‘長州の復権’です。‘禁門の変’で剝奪された〔元治1年8月〕毛利藩主父子の官位復旧、——そしてその前年、文久3年‘8月18日の政変’にともなって追放された三条実美卿らの赦免——‘長州再征’時に幕府が要求した10万石削封・藩主父子への（永）蟄居指示などの取消し、といったことです。しかし將軍はこれを聞き流し、朝廷も容れようとしませんでした。幕府の立場としては、そうするしかなかったのでしょうか。もし長州藩が政治の表舞台に復活すれば、4藩連合は、薩・長を中心とする反幕の姿勢をより鮮明にした5藩連合となって、名実ともに‘雄藩連合’を実現することになり、朝廷も‘尊王=反幕’的な公卿たちの復位で、いよいよ幕府離れが明らかになるだろう

うからです。ですから、4藩主の弁舌だけの提言は体よくかわされることになってしまうのでした。そもそも越前藩〔32万石〕は徳川親藩の筆頭格ですし、土佐藩は外様ですが、かつて山内一豊が徳川家康の知遇をえて大大名に取り立ててもらった恩義〔遠州掛川6万石→土佐24万石〕をいまだに忘れないでいる‘親徳川’藩です。また宇和島藩は10万石にすぎませんから、何ととっても実力不足です。‘4藩’といっても実際は薩摩藩〔77万石〕の動き如何にかかっていたのです。

- (5) こうして西郷は最後の策として‘武力による倒幕’以外にないという判断に行きつきました。藩主もこれに同意することになりましたが、しかし、ことは一直線には進みませんでした。ひとつは土佐藩がいわゆる「大政奉還」路線を打ち出したためです。これは坂本竜馬が出したアイデア——いわゆる「船中八策」——に後藤象二郎が乗ったもので、幕府が政権を朝廷に返し、京都に上・下2院の議事院を創設し、ここに有能な公卿、諸侯、諸藩士、庶民たちを集めて外国との通商条約などを決するという提言です。後藤はこれを西郷のもとに持ち込んで賛同を求めました〔6月〕。徳川の地位についての言及はありませんが、形のうえでは諸侯の一員となっても、超大の藩主ですから、自然議事院に君臨することになって実質的な変化は大きくはないのではないかと、という見通しだったのでしょうか。ともかくこれは成功しなかった‘雄藩連合’の延長上の着想です。すでにそれに見切りをつけていたと言っても、西郷自身も幕府が自発的に「大政奉還」をするよう求めることに反対する理由はありません。そこで土佐と薩摩はこの点で盟約を結ぶことになったのです。

しかし、これと並んで‘武力倒幕’という西郷自身の路線も長州との間で動きはじめていました。8月なかばには大久保が長州にのり込んで毛利藩主の同意をとりつけて協議書が作られ、9月に入ってまず薩兵1000余人が禁闕守護の名目で京に入りました。しかし本格的な出兵はようやく10月に入ってからとなります。薩藩内にもこの挙に消極的な勢力が強かったのです。こうして〈大政奉還要求〉と〈武力倒幕〉とは、実質的には武力行使への反対と賛成という対立を含んで、日程上でも全く競合することになってしまったのでした。そしてそれは1日を争うというより1時間を争う成り行きになったのです。

(イ) 10^月_{3日} 土佐・建白書提出 → 10^月_{13日} 幕議・政権返上決定 → 10^月_{14日} 朝廷に上表文提出 → 10^月_{15日} 聴許。

(ロ) 10^月_{8日} 薩州・討幕の宣旨降下を請う → 10^月_{14日} 薩・長に討幕密勅下賜〔→(薩) 10^月_{13日}付：(長) 10^月_{13日} 毛利父子官位復旧 → 10^月_{14日} 密勅〕、同日請書。

以上のように、両者は全く同じ日、10月14日に幕府と朝廷によって受け入れられたのです。仮に、幕府がその前日、政権返上を決定した日にこれを朝廷に持って行っていけば、「賊臣慶喜」をほろぼせという討幕密勅は——少くとも論理的には——出せないことになったでしょう。事実、密勅降下に働いた3人の公卿——その中心人物は中山忠能〔前大納言、明治天皇の外祖父〕——は10月21日、慶喜が政権返上を申し出たのだから、それをどう実行するかをみるため、しばらく討幕を見合わせるようのご沙汰書を下しています。しかしすでに行動を起している

薩藩はこれを見捨てました。すでに手にした密勅は、異論も少なくはなかった薩藩の意志統一に大きく役立ったのです。11月23日藩主忠義は3000の兵を率いて予定通り京に入り、29日には長州の先鋒700余も西宮まで押し出して、あとはただ薩軍の合図を待つだけの体制になりました。

- (6) 武力討幕の機はすでに熟したので、残るは拳兵の名分です。密勅があり、錦旗の目録も賜っているのですからその限りで大義名分は立っているとも言えるのですが、何といたって密勅ですから薩・長以外のものはあずかり知らぬことです。公式に朝廷の命令にすることが欠かせません。薩摩の強引な宮内クーデタが必至となったのです。12月8日から9日朝にかけて延々で行われた朝廷の大会議が長州父子の赦免を決し散会となったあと、二条摂政以下の親幕派公卿たちの退出をまって、皇居の周囲を兵をもって固め、8日付で宥免（出仕・還俗を許す）とされた岩倉具視ともみがまず参朝して、さきに密勅降下を要請するために働いた中山おおぎまち、正親町三条、中御門と共に、天皇に「王政復古」の断行を上奏し、これに賛成の皇族・公卿・5藩主〔長州、越前、薩、土、芸〕のみを召して「王政復古の大号令」を発することになったのです。これによって従来の摂政、関白、征夷大將軍などすべてが廃止され、新たに「三職」〔総裁・議定・参与〕をもって万機を処理するとされました。三職任命と同時に、二条摂政ら親幕派公卿の参朝停止、謹慎、会津〔京都守護職〕、桑名〔京都所司代〕もその職を免じられたのです。しかしここで大切なのは、以上のような宮廷内組織の変革だけではありません。この大号令を発したその当日の夕方から直ちに開かれた第1回の三職御前会議——いわゆる「小御所会議」——の帰趨が肝心でした。新たにはじまる朝議に徳川慶喜をも参加させるべきだと主張する山内容堂〔土佐〕・松本春嶽〔越前〕と、慶喜の政権返上が心からのものか疑わしいのでまず実績をもってこれを示させるべきであると主張する岩倉・大久保の対決がそれです。どちらにも一理はあるのですが、これは口舌で決しうることではなく、力で押すクーデタですから、結局後者がまかり通り、慶喜が自ら進んで官位を辞し、土地・人民を朝廷に還納するよう要求し、これをもって彼の邪正を判定しようということに決しました。幕府側からすれば受け入れようもない無理難題ともいうべきものです。

はたして慶喜はしばらくご猶予をと申し出ました。辞官はともかく、大勢の旗本を養っているのですから、納地と言われてもすぐさま応じるわけにいかないことは誰がみても明らかです。もしそれでもと強要するなら、徳川家だけでなく‘藩体制’そのものが否定されねばなりません。つまるところ越前・尾州・土佐が調停して、徳川が新政府の財政基盤の創出のために、自己の領地の一部を献納するという事で誠意のあかしとするという妥協案が成立しそうになりました。もしここで何事も起こらなければ、薩摩の武力討幕はその機を失うことになったでしょう。

しかし將軍慶喜は幕府を統率する力をもっていませんでした。‘大政奉還’を決断したのは、しばらく身を屈し、名を捨てて実を取ることにしたのですから、新政府がかさにかかって無理難題をつきつけてきても、じっくり構えて対応しなければ一貫しません。しかし、辞官・納地

まで要求されたと知った幕臣たちは激昂して収まらず、慶喜がこれを鎮めるために二条城から大坂城に退去して説得にかかったのですが、実は彼自身の心も揺れているので、力がありません。そしてそれは当然江戸の老中たちの心にも反映し、三田の薩摩上屋敷に寄宿していた数100人の諸国の浪人たちの一部が街で働いた非行——いわゆる‘御用盗’——の処置をめぐる対立した議論が結局、薩摩征伐の第一挙として薩邸を砲撃し焼打ちすべしと主張する‘主戦派’の勝ちとなって、これが決行されることになったのでした〔12月25日〕。戦いは慶喜の知らないところで、しかし、幕府の側から始められたわけです。手づまりに追い込まれていた薩摩にとって、これは願ってもない幸いでした。一説には、これは薩摩の企んだ挑発に幕府がのせられたのだとするものがあります。薩摩側が浪人集団を養っていたのは事実ですから、京なり大阪なりで幕府と戦争になったとき、江戸ないし関東で彼らを動かし、幕軍の背後を脅かす計画はきっとあったでしょう。しかし、その発端となる挙兵のきっかけをつかみにくなっていたのですから、ともあれ、幕府が戦端をひらいてくれたことは何よりだったのです。

- (7) 他方大坂城ではすでにこれに先立って、12月なかば過ぎころ越前・尾州を介しての朝廷からの入京のすすめがあったのを好機として、慶喜が大兵力を率いて上京し君側の姦を除くべしとの主張が強まり、京坂間にその準備がはじまっていました。そこへ江戸の薩邸焼打ちの報です。もう京都進撃を押し止めることはできません。慶応4〔1868〕年1月3日まず鳥羽で戦いは始まり、その砲声を聞いて伏見でも戦闘となりました。いわゆる‘鳥羽・伏見の戦い’です。戦いは3日から6日まで続き、薩・長軍——4日、仁和寺宮の征討將軍への任命、赤地に日月の「錦旗」の戦場への登場によって「官軍」となる——の勝利に終わりました。終わったと言っても、軍事的に壊滅したわけではありません。6日になって慶喜は突然老中、大目付、外国奉行、会津藩主〔前京都守護職〕、桑名藩主〔前京都所司代〕らのみを同伴し、他には一切秘密で大坂城の裏門から脱出し、海路をとって江戸に帰ってしまったのです。幕軍およそ20,000人、薩・長合せて2,500~3,000という大差がありながら幕府側が敗れたというのは一見意外ですが、そうなる以外はなかったのです。その理由は、

(イ) まず戦闘責任者、慶喜の敵前逃亡です。後年の述懐に「賊名を確定してはならず」と考えたというのですが、それならなぜ部下の進撃を押し止めなかったのか？ 彼にも彼なりの言い分があったろうことはわかりますが、事を起してしまった以上、汚名を濯ぐ方法は、この戦いに勝つか、責任をとって切腹するかとの2つに1つしかなかった筈です。彼はそれができません。戦略に長けてはいたのですが、武將ではなく、従ってまた‘將軍’たる資格がなかったのです。因みに言えば、これは徳川家だけの状況ではありません。少くとも幕末期以降でみる限り、多かれ少なかれどの藩主をとっても自身のリーダーシップをもって時勢に対処できたと思われる者は見当りません。西郷に言わせれば、‘いや順聖公〔島津成彬〕は違う’ということになるでしょうが。

(ロ) 慶喜が‘武將’ではないというのは、彼が事に臨んで優柔不断であったというだけではありません。軍略を全く欠いていたのです。薩長軍が戦端を開く機会をうかがって迎撃体制

を敷いているところへ、将軍の上洛であると触れ込みながら、延々と街道筋をのぼってくるなどということは兵法を知る者にとっては以ての外で、2万の大軍を有効に働かせようとするなら、それにふさわしい戦場を自ら選ぶべきことは常識以前の問題です。それに加えて、薩長軍は海外から購入した最新式の鉄砲を装備し、薩州軍の日頃の訓練もさることながら、長州軍は新編成の奇兵隊ら諸隊がつい—昨年の‘四境戦争’で実地の経験を積んでいるということ を考慮しなければなりません。慶喜は京への進撃に先立って『孫子』の「敵を知り自れを知れば、……」という言葉を引きいて老中に彼我の力の如何を問いただしたといいますが、もしそうであるなら、敵の10倍にもものぼるとは言っても勝利はおぼつかないという判断に行きついたでしょう。なにせ250年も戦う必要がなかったのですから、幕軍の兵器は時代遅れであり、そのうえ—京都から追い出された恨みをもつ会津兵などの例外はありますが—概していえば、幕府への義理立ての出兵です。薩長と比べた戦意の差は明らかでした。

しかし、そうではあっても‘鳥羽・伏見’は先鋒隊の緒戦の敗戦にすぎません。退いて大坂城に立てこもり、軍を再編成すれば十分に戦えたのです。それなのに将軍のひそかな逃亡です。みんな呆れはてて思い思いに江戸へ向って落ちのびていったのです。権力の崩壊は、何もこれに限ったものではありませんが、全くあっけないものだったのです。

- (8) 西郷自身についていえば、‘鳥羽・伏見’の戦いでは彼の出番はほとんどありませんでした。朝廷内の動揺を静め、公卿たちを励ますといったことから手を抜けなかったのです。ようやく2月3日、天皇による慶喜以下賊徒親征の号令が下され、征討大総督に有栖川熾仁親王^{たるひと}、同参謀に西郷吉之助ら4名が任命され、実質的に彼が全軍の総司令官となりました。2月12日京を出、東海道先鋒軍と共に駿府まで来たのは総督府のあらかじめの指示によったのですが、そこに止まらず、なお兵を東に進めて、箱根を起えることにしたのは彼の軍略上の判断でした。3月に入って官軍は品川、新宿、板橋と3方から江戸を包囲するまでになり、3月15日を期して総攻撃決行と決定しました。その前々日と前日〔13、14日〕、勝が西郷を訪ねて会議し、‘江戸の無血開城’となるのですが、これはそれに先立って、慶喜が山岡鉄太郎に頼んで、駿府城にまで進んできていた征討大総督に自らの蟄居謹慎—江戸城を出て上野寛永寺に移る〔2月12日〜〕—の有りさまを伝えようとした機会を利用して、勝が西郷への手紙を依頼して実現をみたものです。西郷が山岡の人物に惚れ込んで、降伏条件の即時履行があれば、慶喜の命と体面の保持と徳川家の存続に配慮すると約束したことが勝・西郷会談の成立を準備したのです。これを踏えて勝が携えていった嘆願書で申し出た降伏・恭順の態様は、慶喜の隠居〔水戸表への蟄居〕、江戸城即時明け渡し、軍器の引き渡し〔ただし、軍艦は海軍副總裁、榎本武揚の管轄で勝の支配下でない〕、江戸市中の士民の鎮定努力などであり、きわめて大ざっぱなものです。西郷はこれを容れて翌日に予定していた総攻撃を中止すると約束したのでした。天下分け目の戦争がこのような宥和的な結末に終わったことには、ごく一般的には、新政府が「王政復古」以上の理念を掲げることが出来ない体質のものであり、徳川家の250年の功績を評価してこれに同情する保守的な空気が流れていたことがあります。直接的には、全く戦闘

意欲を失っている幕府をみてこれを徹底的に叩くという方針を撤回することにした西郷の決断が決定的です。それは彼が単に寛容であるというだけでなく、本来権力欲をもたない人物であったことを示していると思えます。ともあれ、慶応4〔1868〕年4月11日江戸城の引き渡し式が行われ、慶喜は江戸を離れました。家康がこの地に入ってから277年目です。上野の東叡山に集った「彰義隊」の討伐〔5月15日〕が終った直後、新政府はさきに徳川の家名相続人と指名した田安亀之助〔のち徳川家達〕〔田安家は徳川宗家の家族として大名には立てないで来た「三郷」(田安・一橋・清水)の1つであった〕を駿河に封じ、70万石を下賜します。これで徳川家の処遇問題に結着がついたのですが、彰義隊戦争は徳川家にはマイナスに作用し、官軍に利を与えるものでした。というのも、戦わずして江戸に入った官軍は江戸市民には権威をもたず、収入の道を失った榎本をはじめとして不平・不満の徒が横行することになって市街の統制がつかなくなっていたのです。彰義隊の騒動はそれらの反抗分子を排除して新政権の実力を示すよい機会になったのですが、それよりはやく徳川家存続を決定して民心を収めようとした西郷の主張は寛容にすぎるとしてそのままでは通らない成り行きとなったわけです。治安を確立するのが先決だとする木戸の考えに対して、西郷は——100万石前後の下賜を主張したのですが——民衆の生活不安を解消することを第一着と考えたのです。

- (9) しかしここで肝心なのは徳川家の保存そのものについては、誰もが反対しなかったことです。維新戦争の勝者も敗者もともに藩主〔連合〕だったので、当然といえば当然です。名目上は‘王政復古’ですが、実体は‘藩政維持’だったのです。しかしこれは同床異夢です。王政復古の端的な実体化は‘天皇親政’ですから、とりも直さず‘藩政解体’です。維新革命の主力を担った薩摩藩主の立場からすれば、これは許せません。‘島津(久光)幕府’の成立を夢みるということではないまでも、実質的にはこれに近い‘雄藩連合’の長といったポストを希んでいたとみて自然です。事実「王政復古の大本令」とともに任命された「三職」〔慶応3年12月9日〕の中心に置かれた「議定」〔ぎじょう〕は5人の公卿と5人の藩公〔尾張大納言(徳川慶勝)、越前宰相(松平春嶽)、安芸少将(浅野長勲)、土佐少将(山内容堂)、薩摩少将(島津忠義)〕からなっていました。この夜の‘小御所会議’で、「参与」にすぎない岩倉と大久保の慶喜に対する辞官・納地の要求という主張にも島津忠義が賛成しなければ、討幕ではなく、いわゆる‘公議政体’路線が勝利することになっていたでしょう。際どい分れでした。ですから、島津久光の心中にあった許容限度は、まず岩倉・大久保〔・西郷〕のいわばクーデタで破られてしまったのではありますが、いまあらためて徳川家を70万石の藩主として建てるということになってみると、息をふきかえすことになりかねません。久光の動きを封ずることが必要になっていました。西郷は彰義隊を片付けると、奥羽地方ではなお諸藩が連合して官軍に強く抵抗を続けていることを聞いて増援軍を組織するため一旦薩摩に向いました。京で忠義自身が出兵の準備をしていたのを押し止め、共に鹿児島に戻ったのですが〔6月14日〕、新しく2大隊が出発と決まるまでにそれから1ヵ月半以上〔8月3日〕——本隊出動は2ヵ月以上——もかかっています。久光が急を要する増派の要請に即応しなかったため、増派隊が現地に着いたとき

事態はすでに終息に向っていたようです。最後まで強く抵抗した会津藩と庄内藩も相次いで降伏し〔9月22, 23日〕、北海道を除いて、維新戦争は終わったのです。因みに、庄内藩はこの戦争の発端である‘三田の薩摩藩庁焼打ち’〔慶応3年12月〕に主力となって働いたという因縁がありますが、降伏時の官軍、とくに西郷の対応が極めて寛大だったことに感動し、維新後〔明治3～4年〕、藩主、酒井忠篤は藩士70余人を引きつれて、薩藩に遊学し、西郷に教を乞うほど彼に傾倒しました。今日、『西郷南洲翁遺訓』として遺されている書物はこのときにはじまる両者の交流の記録です。

西郷は庄内藩の処置が済むと、すぐまた鹿児島に帰りました〔明治1年11月初〕。すでに7月東京と改名〔9月8日明治と改元〕していた江戸をほとんど素通りしての帰国ですから、皆驚きました。新政府建設の仕事はこれからというときですから、長州人たちはとくに憤慨しました。しかし西郷の気持は、「征討大総督参謀」という自分の任務はもう完遂した、あとは行政の仕事なのだから、大久保、木戸らの出番だということだったのでしょうか。正確に言えば、奥州への増派軍の組織のために帰藩したときからすでに、彼は新政府の要人でなく、薩摩藩人に戻っていたのです。久光の野心を野放しにしない重しとなるのが維新の第1幕を結ぶ最後の仕事だと考えたのです。

- (10) 西郷は藩の参事に任じられて藩政の合理化に努めはしましたが、明治4年2月まで東京には出ませんでした。前年の末に中央政府は西郷を呼び返すことが是非必要と考えるに至って、岩倉が勅使となり大久保と木戸とがこれに随行するという大仰な顔ぶれで鹿児島に下ってきたのです。久光がこれをさまたげないように、久光にも中央に出るように声をかけ、そうなればバランス上、毛利敬親もというように話がひろがったのでした。ともあれ、西郷は出てきて〔4年2月2日〕木戸と2人で初代の「参議」となって政府の中心にすわり〔6月25日〕、維新革命の総仕上げである「廃藩置県」の実行に取りかかりました。そのための地ならしは木戸・大久保らによってすでに「藩治職制」制定〔明治1年10月〕——藩行政組織の統一——、「版籍奉還」〔2年6月〕——薩長土肥4藩の提唱という形をとって、諸藩に及ぼした「版〔土地〕と「籍」〔人民〕の朝廷への還納〔→藩主の知藩事への任命〕〔→公卿・諸侯を「華族」と改称〕——として進められていたのですが、これらはいわば名ばかりのことですから、旧来の藩体制の実質を変化させるものではありません。ですが、〈藩〉そのものを潰してしまうこと、これはもう‘行政’レベルの仕事ではなく、端的に‘政治’の課題です。木戸や大久保に自信はありません。西郷しかない、ということになったわけでした。ひるがえって想えば、明治維新革命は反幕的な諸藩主を糾合し、なだめたり、すかしたりしながら、その力を討幕に利用し、気がついてみれば、討幕に働いた藩主たちもろとも〈藩〉そのものが消えてなくなり、中央集権国家が創り出されているという手品まがいのプロセスだったわけで、最後には手品師が舞台上に登場して喝采を浴び、幕が降りる運びとなるのです。明治4年2月13日、朝廷守護のため薩・長・土3藩が「御親兵」〔約1万〕を供出するという名目で中央に兵力を集め、これが整った7月14日、それまで秘めていた「廃藩置県」の「詔書」を發布しました。それは、

「……仍テ今更ニ藩ヲ廢シ県ト為ス、是務メテ冗ヲ去リ簡ニ就キ、有名無実ノ弊ヲ除キ、政令多岐ノ憂無カラシメントス……」とあっさり言ってのけていますが、政府内でも人々は仰天しました。当時司法省の責任者であった佐々木高行〔土佐藩出身〕の日記はその有り様を伝えてこう言っています。

「翌日、大臣・納言・参議・諸省長次官等、皇城中御舞台ニ集会ス、各自議論紛紜如何ニ処置スベキト、就レモ声高ニ成リ居タル場合、遅刻ニテ参議西郷隆盛参ス、西郷各自ノ議論ヲ点シテ開キタルカ、大声ニテ此ノ上若シ各藩ニテ異議等起リ候ハ、兵ヲ以テ撃チ潰シマスノ外アリマセント、此ノ一言ニテ忽チ議論止ム、実ニ西郷ノ権力、サシモ議論家ノ面々モ一言ナシ、非凡ナル事他ニナシ」

この結果、全国行政組織は東京・大阪・京都の3府と302県から成ることとなり〔同年11月の改置府県により、3府72県に統廃合〕、旧藩主は家禄と華族の名称を保障されて東京へ移住させられ、各藩の債権・債務は年貢とともに中央政府に移管され、知藩事に代って、府知事・県令が中央から派遣となって、行政組織に関する限り、明治中央政権国家の骨格が確立したのです。

- (11) ここからあとの政治過程、いわば維新の第2幕にはもう立ち入らないことにします。ただ西郷にかかわる限りでの節目をいえば、(イ) ‘岩倉遣欧使節’ 派遣〔明治4年11月～6年5月(大久保)：7月(木戸)：(岩倉)] に際して、その留守を三条実美(太政大臣)と共に担当；(ロ) 岩倉・大久保・木戸・伊藤らの帰朝後、すでに太政官の議決を経て決していた遣韓大使就任を覆されて、参謀を辞し〔明治6年10月24日〕、帰国＝いわゆる‘明治6年10月の政変’〔江藤・副島・板垣・後藤各参議辞任〕；(ハ) 明治10年2月～9月のいわゆる‘西南内戦への決起と戦死’；の3点です。そしてその要点はといえば、明治6年の西郷と大久保の決裂であり、またそれに尽きます。表面的にみれば、それは対朝鮮関係の調整を急務とするか、富国強兵のための内治を第一とするかの対立で、いずれにも理がある政策上の対立にすぎません。いかに重要な国策のこととはいえ、妥協の余地が全くないものではない筈です。それが抜き差しならないことになったのは、両人がこの時の論争を最後にお互いの人格への信頼関係を失ってしまったからです。青年時代から兄弟もただならぬ仲だった2人のことです。その反動も多少ではなかったでしょう。もっともこの二人の個性ははじめから異質でした。西郷は端的に言えば軍人でも軍略家でもなく、外交官的な政治家でした。策を弄することをせず、誠意と寛容をもって、接する相手の信用を得るタイプの人間です。島津斉彬の遺志をついで薩摩藩と他の諸藩との友好関係を深め、討幕の流れをつくり出しました。正面の敵である幕府に対してさえ抵抗をやめれば、力づくでとことんまで追いつめるということを好まなかったのです。『孫子』のいう‘戦わずして勝つ’ことを最上の策として実践したのでした。これに対して、大久保は人並みはずれて強固な意志をもった官僚的政治家でした。眼前の権力者・権威を前提とし、これに取り入ってその影響下にある勢力を最大限に動員して目的を達成するタイプです。良くも悪くも権威の性質に拘泥しません。島津久光であっても、朝廷であっても、討幕の目的

に利用できればよいのです。彼の徹底性が徳川幕府のドラスティックな崩壊を引き起したのです。しかし、この二人三脚は共同の目標が失われてしまえば、そしてどちらかが主導権をとるかということになれば、維持され続ける保証はなかったのです。

- (12) しかしそれが喧嘩別れになったのは、直接には大久保の変心でした。維新直後には農本的で保守的な思考で将来を考えていた彼は、西郷からみれば‘西欧かぶれ’になってヨーロッパから帰ってきたのです。2人間の議論のズレは、西欧の近代文明を実見しての上か否かという超えようのない次元の落差をもつものになったのです。遣欧使節に理事官として加わった佐々木高行が、米国から英国に向うアトランティック号の船中で書きつけたノートの中に〔明治5年1月〕、「……岩〔倉〕公・大久保公ハ、兼テ見込モ合ヒタリト思ヒ……随分示談モ調ヒタル心地セシニ、今般米国ニテハ、伊藤博文・森〔右礼〕弁務使ナドノ「アラビヤ論」〔僅四五人「アラビヤ」ニテ、雲霞飛行〕をなすように「開化」に向けて突出しようとする考え……（引用者注）〕二同ジタリト見ヘヌレバ、最早共ニ政事ヲ計ル人モナシ……」と嘆じたかたがあります。まだヨーロッパを見る前にこんな変化が起っていたのです。そして大久保はフランスの整然とした中央集権的行政・警察機構に感銘を受け、これをモデルに日本に内務省を新設することを構想して帰ってきたのです。渡韓してアジアでの連携の突破口を切り拓こうと心に極めていた西郷と対立したのは当然の成り行きです。『西郷南洲遺訓』の中の1節は、はっきり名差してこそいませんが、この論争を回想してのものだったのです。

「文明とは道の普く行はるゝを賛称せる言にして、宮殿の壯麗、衣服の美麗、外観の浮華を言ふには非ず。……予嘗て或人と議論せしこと有り、西洋は野蠻ぢやと云ひしかば、否な文明ぞと争ふ。否な野蠻ぢやと疊みかけしに、何とて夫れ程に申すにやと推せしゆえ、実に文明ならば、未開の国に對しなば、慈愛を本とし、懇々説論して開明に導く可きに、左は無くして未開蒙昧の国に對する程むごく残忍の事を致し己を利するは野蠻ぢやと申せしかば、其人口を答めて言なかりきとて笑はれる。」

頑迷に国を鎖している李氏朝鮮国を説得して親善関係を結び、連撃して国際社会の一角に然るべき地歩を占めようとするのは、極めて困難な事業であることは言うまでもありません。そうした考えをもつこと自体当時の日本では稀なことでした。西郷の近辺では、維新前からずっと日・中・韓「三国合従して西洋諸国に抗すべし」〔文久2年將軍家茂への建築〕と主張していた勝海舟だけだったと思います。その勝は‘留守政府’の時期に海軍大輔〔明治5年5月～〕として海軍省を主宰していたのですから、西郷・勝の対話のなかではアジア政策が何度も話題になったでしょう。西郷が対韓使節の派遣にどこまでもこだわったのは、そうした対話を通して彼のなかに形づくられた‘国際社会のなかの日本のイメージ’の故だったに違いありません。そして彼が自らその特任大使の役を買って出たいと申し出たのは、この仕事の容易ならざることを知りつつ、なお‘外交’——かつては‘藩’にとっての、そしていまは‘日本国’にとっての——政治家として歩んできた自身の出番がここにあると確信したからです。‘私が殺されたら戦争になるだろうが、それは正義の戦争だ；そしてそれを担うだけの兵力は廃藩で

失業している不平不満の士族で充分まかなえる’ といったことを彼が言ったという伝聞は、‘征韓’ といったことをさわぎたてる人々を前に置いての言葉のアヤで、彼自身は韓国で殺されるなどとは少しも考えていなかったのです。「正道を踐み、義を尽すのは政府の本務也」と彼は言っていますが、その限りでは「戦の一字を恐れ」ず、「国を以て斃る」の精神無くば、外国交際には全かる可らず」というのです。それ以上は「天」命であって人の意志を超えている；われわれの生きざままで「天下後世迄も信仰悦服せられるものは、只是一箇の真誠なり」というのが彼の覚悟でした。

- (13) 西郷隆盛の思想はほとんど全く儒学の言葉で語られています。むろん、いたづらな引用でなく、繰り返し反芻し消化したうえでの言葉です。ごく自然に宋学から入って古学に及ぶという勉強の仕方でも、それも朱子・陽明など特定の説にこだわっていません。邦人の先学としては、儒宗と呼ばれるほどの名声をえた佐藤一斉〔1772-1859年、美濃岩村藩より出て幕府昌平校儒官となる〕の『言志録』に依拠するところが大きかったようです。

西郷のゆきついた最終的なモットーと言うべきものは、〈克己〉と〈敬天愛人〉に尽きるでしょう。

〈克己〉とはひらたくいえば「無欲」です。さきに流人として大島に暮したとき、島の子弟を教えるなかで、一家仲よく暮せる方法は何かと問いかけ、子どもらが「五倫五常」を守ると答えたのに対して、そんなお題目ではだめだ、欲を捨てることが肝心なのだと言ったという逸話が伝えられています。‘無欲’とは、欲一般の否定ではなく、私欲をなくすこと、つまり「己れを愛するは善からぬことの第一也」というのでした。「命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ人は、仕末に困るものなり」というのは、彼自身がそう生きたいと考えているというわけですね。

- (14) では〈克己〉はどうやったら可能になるのか？ それは「慎独」であると彼は言います。〈慎独〉〔1人あるときに身を慎む〕とは、「いわゆるその意を誠にすとは、自ら欺く母きなり。故に君子は必ずその独を慎む：「……中^{うち}に誠なれば外^{あは}に形わる……。故に君子は必ずその意を誠にす。」とありますが〔『大学』〕、〈誠〉にもピンからキリまであり、西郷は「誠はふかく厚からざれば、自ら支障も出来るべし」とそれをつきつめようとしています。「……「主^{トシ}静^ヲ立^ツ人極^ヲ」、是其至誠の地位なり、不^レ慎べけんや、人極を立ざるべけんや。」と云うのです。‘静ヲ主トシテ人極ヲ立ツ’ という句は宋学の祖とされるの周濂溪の語で、佐藤一斉の注釈では「周子静を主とす、心本体を守るを謂ふなり。図説に「欲無し故に静」と自註す、……」とあり、西郷はこれに依拠して、〈人極〉を立てようというのでした。周はこの世の森羅万象の根元として〈太極〉を設定したわけですが、西郷は私たち〈人〉はその中にただ包摂されてあるというのではなく、〈太極〉のいま一つの極に自立する主体としての自覚をもつべきだとするので、松陰は「人唯一誠ナリ」と言い、西郷も「只是一箇の真誠也」と「誠の篤き」ことに行きついたのでした。

- (15) そこで〈誠〉とは何か、ということになりますが、「誠は天の道なり。これを誠にするは人

の道なり。……」〔『中庸』とあるわけですから、誠を自らのものとしようとする人は「天道」を受容しなければなりません。西郷はこれを「天道を行ふ」と言うのです。ここで〈天道〉とは「天地自然の物」、つまり天地自然の理に従って考えかつ生きようという素直な人生観＝世界観に行きつきます。「道は天地自然の物にして、人は之を行ふものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給ふゆえ、我を愛する心をもって人を愛する也。」これが〈敬天愛人〉です。〈克己〉というおのれ1人の内面的修養は、〈敬天愛人〉を志す政治的実践として表に現われるのです。

- (16) ここで大切なのは〈志〉の高さです。「聖賢に成らんと欲する志無く、古人の事跡を見、^{とて}逆も企て及ばぬと云ふ様なる心ならば、戦に臨みて逃るより猶ほ卑怯なり」、^{とて}「聖賢の書を空く読むのみ」でなく、「其の^{とて}処分せられたる心を身に体し、心に験する修行」が必要だとするのです。では「^{とて}聖賢」とはどんな人物か？となると、「堯舜を以て手本とし、孔夫子を教師とせよ」とあります。ですから、こうつきつめて行くと、実は〈敬天愛人〉の政治を担いするのは「^{とて}聖賢」をおいて他にはないということになりましょう。またそうみることによって、はじめて彼の言うところを首尾一貫して理解できると思われます。

そうですから、西郷は天地自然の理を体現する〈聖賢〉政治だけを崇ぶのであって、そうでない俗人の政治は眼中にないのです。「人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして、己を尽して人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。」——これが彼の処世訓となったのです。

- (17) これを幕末＝維新時点で見ると、西郷が〈聖賢〉の立場を強調したことは、当時「志士」の間に流行した〈尊王〉の主張に同化しないことを意味する点で、西郷の独自性を示すことになりました。自身の人格では人を動かさず、ことごとに天皇の名をかりて、勅諭とか勅諭とかと称して自己の立場を正統化する風潮——大久保の政略はその典形ですが——のなかで、西郷のみが唯の一度も天皇の権威におもねることがなかったことは特筆に値します。彼も「愛国忠孝」を口にするのですから、朝廷や藩主に仕えることを拒むわけではありません。しかしそれはあくまで〈聖賢〉の見地にならなっているか否かによって判定されます。西郷は島津成彬＝「順聖公」には心から臣従しましたが、その弟、久光に対しては面従腹背の立場で一貫しました。維新後に、久光は「徳川家を倒す気はなかった。西郷と大久保に騙された」と憤慨しましたが、西郷との確執は私情の次元のものではなかったのです。
- (18) 明治10年に西郷が決起した「西南内戦」は、明治6年以来の西郷・大久保間の対立に力をもって決着をつける戦争でした。西郷が私欲を捨てた「至誠」〔聖人・君子〕の担う政府をと希んだのに対して、大久保は「近代」の興隆は私欲の解放を前提としてもたらされるのであって、政府はこれを整序統制するものとなるべきだという新知識に組することになったのですから、原理的に和解は不能です。政府のなかで最も中立的な立場をとっていた佐々木高行も西郷「暴挙」の報に接して、「……甚可怪事と、何れも驚愕……、西郷の大不平に至り候廉、何々事件かと存〔じ〕……一々竝立て、見るに、不平の廉は未だ認め不申候……」と訝っていますが、

ことは個々の政策の次元にあったのではないのです。彼の久しい不満は、かつての同志たちが廟堂にのぼってからは、「克己」の精神を放棄して墮落してしまっている実情です。「……草創の始に立ちながら、家屋を飾り、衣服を文^{かさ}り、美妾を抱へ、蓄財を謀りなば、維新の功業は遂げられ間敷也。今と成りては、戊辰の義戦も偏へに私を営みたる姿に成り行き、天下に対し戦死者に対して面目なきぞ……」という彼の心事は、おそらく大久保個人には理解されていたでしょうが、彼としては後戻りできません。打開の道は二人の直接の対話による妥協しかなかったのですが、兩人ともそれを求めませんでした。次善の策として岩倉が勝海舟に融和の労をとってくれと頼んだのですが、「行かないこともないが、その代り全権です、……大久保でも木戸でも、免職させるかも知れぬ」と言われて、やめになったのです。そうなら最後の策として、もう一度勅諭という呼び出そうかとも考えたというのですが、もし西郷が諾けなければ、天皇の權威に傷がつくというのでそれもできず、遂に戦争に至ったのです。彼の挙兵の名目は「拙者義今般政府へ尋問之廉有^レ之……」とだけあって、もとより自ら求めてのことではないのですが、「朝敵」とされることは覚悟の上だったわけです。政府側は、彼の宿陣の表札に「新政大都督」「征討大元帥」と大書してあったとの報告を引いて、「自ら天下を掌握^レ趣旨と相見候……」と非難していますが、これは単なるあげ足とりという以上に、事の真相に触れていたのかとも思えます。「新政」は西郷の主宰する「聖賢国家」以外ではありえないからです。

- (19) 西郷が勝利の確信をもって行動を起したのかどうかはわかりません。ただ、彼が誇らかに遺した七言絶句の一節に「丈夫玉碎愧^ツ甄全^ヲ」との死生観が示され、結果の如何は〈天命〉であると悟っていたことは確かでしょう。彼は「英雄」たる者の資質は何よりも「胆力」にありとし、「大義」のために行動すべきことを強調しました。しかしむろん戦いに臨んでは「作略」の必要も考えています。このときの一挙が、「理ニ当リテ後進ミ、勢ヲ審^{ツマビラカ}ニシテ後動ク」という彼の「理」・「勢」の判断に照して果たしてどうであったか、これにはその直後から多くの議論がありました。「理」についていえば、それが「天道を行ふ」ものであるという彼の運命論的な正しさも、欧化一辺倒の時代には理解され難いのであって、もっと説明を要したのではないかという批判には一理あります。また「勢」という点では、徴兵制を敷き、財力を傾けて建設されてきている政府軍の整備という新しい現実があります。‘鳥羽・伏見’のときのように西郷が立てばこれに従う者が自然に増えて官軍が形成されるといった運びになろうと安易に考えるわけにはいきません。しかし同時に、この前々年の「金禄公債証書発行条令」〔華士族の家禄・賞典禄廃止〕、前年の「廃刀令」によって、旧武士尽の不满は全国にみなぎっていたのですから、そのきっかけが「私学校」生徒の暴走であったにもせよ、西郷のいう「真の機会」——「僥倖の機会」ではなく、「大事に臨では是非……引起さずんはあるべから」さる「設け起す機会」——であったとも見られましょう。軍略のレベルでいえば、熊本県の攻略などで寄り道せず、一直線に本土に渡って東進すれば、勝機は充分彼にあったと説く者もあります。「西郷、兵を知らず！」とは板垣退助の評です。歴史を反復するわけにはゆきませんが、実際

に勝敗は予断しがたいものだったようです。陸軍卿山県有朋は開戦先立って「假今西郷隆盛賊トナリ、鬼神ノ如ク妙術ヲ得タリ共、兵器・銃器・弾薬・金穀等限アリ、討滅スル旬日ニアルベシ……」と予想したのですが、戦闘は実に7カ月余に及び〔明治10年2月17日～9月25日〕、政府軍〔60,831人〕vs西郷軍〔40,000余人〕の対決は、それぞれ死傷者15,801人〔うち死者6,273人〕vs約20,000人という空前の大戦争になり、遂に西郷の自刃をもって幕を閉じたのでした。しかし、この戦いで名を残したのは、勝者山県ではなく、敗者西郷です。明治22年2月、武力をもって天朝に反逆したこの‘朝敵’の賊名を解除し、彼が近代日本建設の最大の功労者であったことを追認しました。そして上野の山に建てられた西郷の銅像〔明治31年竣工〕は江戸とその市民百万を戦禍から救い出してくれたこの恩人を永く記念するものともなりました。「天下後世迄も信仰悦服せらるゝものは、只是一箇の真誠なり」という彼の言葉は実証されたのです。

4. 勝海舟〔1823-1899〕

勝海舟は、ここまで見てきた3人——松陰、高杉、西郷——とは異って、維新革命の積極的推進者ではなく、少なくとも表向きは、これに抵抗する徳川幕府の旗本でした。しかし、にもかかわらず、この日本の近代革命がどのようなパターンのもとなるかについての彼の状況判断は決定的でした。といっても、彼の思惑通りにことが運んだわけではありません。むしろ、彼の計画は挫折し、彼の意見は無視されることが多かったのですが、この重要な節目には彼が登場することになるのです。

- (1) 勝の維新革命への第1の貢献は、革新の路線を〈公式合体〉から〈雄藩連合〉へ変換するアイデアを提示したことです。これは元治1年9月の勝と西郷、両人の初めての出会いでのことです。勝は咸臨丸艦長としての渡米・帰国のあと、軍艦奉行というポストに昇進し、このとき神戸に海軍操練所を開いて、諸国からこれに加わりたいと集ってきた人物を訓練していました。西郷は‘安政の大獄’で僧月照と入水自殺未遂事件を起し、更に久光の引兵上京・幕政改革路線と対立して、2度の流人の生活を送ったあと、再登用されて薩藩京都藩邸の軍賦役についていました。西郷が島の生活を送っていた文久年間に長州藩を牽引力とする尊攘運動が高揚し、京都をめぐる政界は‘勤皇’と‘佐幕’の鋭い対立に2分化して、安政期に島津成彬の‘公武合体’の統一政権づくりの構想は現実的でなくなってきていたのですが、それに代る新しい路線がまだ見出せない、……そういう時点でのことです。

海舟の後年の回顧談はこう言っています。「西郷は、兵庫開港延期のことを……ずいぶん心配して居たようだったが、しきりにおれにその処置法を聞かせよというワイ。そこで、おれがいふには『……まず外国の全権に……天皇の勅諭を安んじ奉るために、しばらく延期してくれと頼むサ。そして一方に於ては、加州、備州、薩摩、肥後その他の大名を集め、その意見を採って陛下に奏聞し、更に国論を決するばかりサ』と、かういった。それから彼の問ふに任せて、

おれは幕府今日の事情をいっさい談じて聞かせた。……」

他方、西郷はこの会談の直後に大久保一蔵〔→利通〕にこう書き送っています。「勝氏へ初めて面会仕り候ところ、実に驚きいり候人物にて、最初打ち明け賦ぼなしにて差し越し候ところ、頓と頭を下げ申し候。どれだけの智略これあるやらしれぬ塩梅に見受け申し候。先ず英雄肌合の人にて、佐久間〔象山〕より事の出来候義は、一層も越え候わん。学問と見識においては、佐久間抜群の事に御座候えども、現時に候ては、この勝先生とひどくほれ申し候……」

両人の議論の詳細はわかりませんが、幕臣である勝が当時最大の事案である外交問題の解決を幕府ぬきの雄力諸藩の合議体制で決してゆくという方法を提起したことが西郷を驚かせたのはもっともです。これで棚上げされた幕府はいわば自然に内治を含めてその権力を失ってゆく成り行きになるだろうという含意です。その内情はかくかくしかじかで、もう幕府は政治体制の変革の主体に数え上げる力がないという見通しを語ったのです。〈雄藩連合〉＝‘徳川幕府の自然死’というこの構想が、勝の一番弟子である坂本竜馬を経ての土佐藩の‘大政奉還建白’へと具体化してゆくのでした。西郷の‘討幕’構想は、一面では例えば平野国臣の『尊攘英断論』〔文久1年：大久保は平野からじかにこの説を聞いた〕のようなラディカルな武力討幕論に影響をうけたことは確かですが、それ以上に勝の‘幕府棚上げ’論——その限りでの宥和的路線に共感を覚えるものだったのです。

- (2) 勝が政治の大局を左右する積極的役割を担ったのは維新戦争の最終局面での働き、〈大政奉還〉の流れを最終的に定着させることとなる再度の西郷との会談＝‘江戸の無血開城’でした。これは革命としては徹底性を欠くとときに指摘しましたが、それは途中で腰折れになって中途半端に終わったというのではなく、もともと西郷と勝の維新のイメージがそうした性格のものだったことによるのです。兩人とも戦いをおそれるものでなかったことは言うまでもありませんが、それはやむをえない最後の手段である点で‘平和主義’者だったのです。‘勤王’とか‘佐幕’とかいう観念を至上のものとしてやみくもに力でその是非を争おうとする当時の支配的な風潮に反対して、最も肝腎な主題、日本に統一権力を実現する現実的で具体的な道を追究しようとしたのです。それは〈藩〉の立場を超えて〈日本〉という括がりのなかでものをみること、そしてそこに実現されるべき目標は、自己の名誉といったものではなく、民衆の平和な生活の保全であるというごく自然な感覚です。ひるがえって考えれば、近代革命にはイギリス型も、フランス型も、ドイツ型も、そして日本型もあるという多様性の観点で理解されるべきなのでしょう。むろんそのタイプに従って、それぞれの近代社会はそれぞれの特色をもつものになったのですが。
- (3) この点で勝は西郷に対して絶対的に有利な足場を築いていました。ヨーロッパ諸国についての知見です。長崎海軍伝習を唯1人はじめから終りまでの3年2ヵ月間勤め上げた経験〔安政2年10月～6年1月〕はそのはじめです。「外国から船が来ると、……出島のオランダ領事館へ寄り、……〔海軍伝習のオランダ人〕教師もワシも、一処にテーブルによばれることになっていた。それだから極く懇意で、向うも、日本の形勢をワシに一々尋ねた。……私はたいそう

必要な人になった」のです。そしてこれに引続いて咸臨丸艦長としての米国訪問です。「……日本捻仕掛の蒸気船……港内へ乗来ル其様中柱の上に国印総白の真中に朱丸あり、……右軍艦は日本大帝国使節の乗組みたる船〔米軍艦ポーハタン〕よりも先へ来る、……捻仕掛蒸気軍艦の我国に來りしは彼国最初の船なり、但し日本は鎖国として他国へ船を出す事を許容なきとありしに実に希に珍しきことなり。……此船の司は材木撰津守、船将勝麟太郎、……船は規則正しくして奇麗なり、……水夫は遣い能くして働きもよし、……」とサンフランシスコの新聞は報道しました〔因みに、福沢諭吉も、木村の従者として同船し、はじめてアメリカを見聞したのでした〕。勝は日本から世界をみただけでなく、世界が日本をどう見ているかをも実感的に知りえたのです。

これに対して、西郷は薩摩しか知りません。成彬の引き立てによって国内の他の諸藩を廻る機会をえていただけ恵まれていたわけですが、それでも鹿児島から見た日本がせいぜいです。勝の言説に接して「どれだけの智略これあるやらしれぬ……」と一驚したのも無理はありません。

しかし、西郷の目はもともと外に向ってはいなかったようにみえます。内省的な性質もあったでしょう。そして境遇の違いも大きかったのです。勝には、幕府上層部のおおまかで杜撰な指示の枠があるとはいえ、將軍の旗本でございと言えどこでも気分に歩き廻れる自由がありました。西郷には毛利藩主の指令を少しでも超えれば、処罰が待っているのですから、眼前の使命をひたすら遂行するか、隠退を考えるかの選択しかなかったのです。当時のすぐれた志士が一樣に外を目指したこと——松陰も高杉も同様です——と対比すれば、西郷は全く例外的であったわけで、これは足が地についている実直な生き方といえと共、彼の限界でもあったのです。アジアを侵略して来た「西洋は野蛮ぢゃ」という極めて正しい見地は、その「西洋」は何故そうなのかを知ろうとする知的関心の深まりをさまたげる方向に働いたように思えます。

- (4) 海舟が西郷と異なっているのは〈志〉という言葉を使っていないところにあると言ってもよいでしょう。西郷の〈志〉は一度立てたらどこまでもそれを貫かずにはおかないという長期のそれですが、海舟にとってはその都度の目標以上ではないのです。西郷の七言絶句をその冒頭句にさかのぼっていま一度読み返せば、「幾^{ヒカ}歴^テ辛酸^ヲ志始^テ堅^シ。丈夫玉碎愧^ヅ慚全^ヲ。……」とあって、〈志〉は自身の生命の捨てどころをイメージしてのものなのですが、海舟は「主義だの、道だのといって、ただこればかりだと極めることは、私は極く嫌いです。道といっても大道もあり、小道もあり、上には上があります。その一つを取って他を排斥するということは、不断から決してしません。……」と言うのです。海舟にとっては、そのときそのときの身の処し方が一番大切なのです。「一体、政治家は、機勢の変転というものを見なければならぬ。」「おれなぞは、一つの方法でいけないと思ったら、更に他の方法を求めるといふ風に、議論よりはとにかく実行でもって国家に尽すのだ。……」とも言っています。

- (5) 海舟はこの彼の思考を「機^ハと着^ノ手^ノの二つさえ誤らねば、みんな放置して置いて善いのだ」と要約してもいます。「機は感^ズべきもので、言うことの出来ず伝達することの出来んもので

す」とも言います。この〈機会〉と〈着手〉という独自の定式は、西郷が「……機会といふべきもの二つあり。僥倖の機会あり、又設け起す機会あり。……」というのと一見近似しているかに見えますが、実は全く違うのです。西郷の言わんとするのは「大丈夫僥倖を頼むべからず、大事に臨では是非機会は引起さずんばあるべからず。……」という点なのです。海舟にあっては、〈機会〉は何であれ必ずと兆してくるものであって、人の能不能はこれをいち速く感得できるか否かにすぎない。いわば〈受身〉の機会なのです。しかし西郷の狙っている〈機会〉は「設け起す機会」、つまり自ら創り出す〈能動〉の機会です。ですからそれは「理と勢」を知っているものでなければなりません。「当^{ツテ}理^ニ而後進^ス。審^{ニシテ}勢^ヲ而後動^ク」という理知的なものでなくてはならないのです。

そういうわけで「戊辰の変」は勝のみるところではこうなります。「この時幕議では、事の起りが少々の行違いだから、たいした事にもなるまいとの説だったけれども、おれは独りで、西郷めがこの機に乗じて、天兵を差し向けはしないかと心配して居たところが、果してやって来たワイ……」「西郷でも、コチラへ来る時、西京で色々議論があった。スルト、〔彼〕一人見えなくなって伏見へ来た。先生が行くというので、ゾロゾロ五百人程がついて来た。それが官軍になった。……」「気運といふものは、実に恐るべきものだ。……彼らは王政維新といふ気運に乗じてきたから、おれもたうたう閉口したのだ。」

因みにいえば、この〈機会〉と〈着手〉の重要性を海舟に悟らせた人物は横井小楠〔肥後熊本藩士；一時松平春嶽の顧問となる〕だったようです。海舟は「おれは、今までに天下で恐ろしいものを二人見た。……横井小楠と西郷南洲とだ。」と回想していますが、西郷については、「その意見や議論は、むしろおれの方が勝るほどだったけれども、……及ぶことの出来ないのは、その大胆識と大誠意とにある」と言い、「横井は、西洋の事も別に沢山は知らず、おれが教えてやったくらいだが、その思想の高調子な事は、おれなどは、とても梯子を掛けても及ばぬ……」、「一を聞いて十を知るといふ風で」あったと評しています。「高調子」というのがどういうことなのか今一つははっきりしませんが、「小楠といふ男は元来物に凝滞せぬ……。一個の定見といふものはなかったけれど、機に臨み変に應じて物事を処理するだけの余裕があった。」「世の中の事は時々刻々転変窮りなきもので、機来り機去り、その間、実に髪を容れずだ。……当時この辺の活理を看取する眼識を有したるは、ただ横井小楠あるのみ」と絶賛しています。勝自身「何をするかわからぬ」と他人におそれられたのですが、その勝をしてなお一驚させる奔放な発想をする人だったようです。「平生我侷一辺に暮して居た」というのは後年の頃の印象ですが、「乱暴な人〔で〕……若い時は、カラしかたがなかった」とも言われています。海舟の性分に合っていたのでしょう。「横井の思想を、西郷の手で行はれたら、もはやそれまでだ」とも繰り返し言っています。

- (6) 以上を総括してみれば、勝海舟という人物は、「武芸者的政治家」だったと言えます。「本当に修業したのは、剣術ばかりだ。師とした「島田虎之助といふ人は「今時みながり居る剣術は、かたばかりだ。せっかくの事に足下は真正の剣術をやりなさい」といって」、「剣術

の奥義を極めるには、まづ禅学を始めよと勧めた。……たしかに十九か二十の時であった」。「かうして殆んど四ヶ年間、真面目に修業した。この坐禅と剣術とがおれの土台となって、後年大層ためになった。……沢山剣客やなんかにひやかされたが、いつも手取り〔手捕り〕にした。この勇氣と胆力とは、畢竟この二つに養はれたのだ。危機に際会して逃れられぬ場合と見たら、まず身分を捨ててかかった。」「禅機は万事に 응용して、一種の妙味を添ゆるものだ。……無我無心は禅機の極意だ。人一たびこの境に達す、真個天下敵なしだ。」

〈剣術〉と〈禅学〉と聞くとまず思い出されるのは、不世出の剣法者宮本武蔵でしょう。事実また、海舟が武蔵を崇めていたことは、すでに「兵法」を論じた箇所でも触れました。『五輪書』も当然読んでいたでしょう。といっても、この両人が同じように行動したわけではありません。「先づ太刀をとってはいづれにしてなりとも、敵をきるといふ心也」と口に出して言い、実際にも30歳になるまでに60余度迄勝負して常に手を切ってきたのです。海舟はこれとは逆で、「おれは今日までに、都合二十回ほど敵の襲撃に遭ったが、現に足に一ヶ所、頭に一ヶ所、脇腹に一ヶ所の疵が残って居る」と言いつつ、「いつでも、こちらは抜いたことはない。」「私は人を殺すのが大嫌いで、一人でも殺したものはないよ。……刀でも、ひどく丈夫に結わえて、決して抜けないようにしてあった。」と自慢するのです。といっても、剣の‘術あるいは芸（アート）’を追求する者としての共通性はむしろです。武蔵のいう「有構無構」〔構はあって構えはない〕とか、「心は敵の太刀をおさへ、身を空にして、敵の出たる処を太刀にてうてば……」とか、「兵法の戦に、其敵々の拍子をしり、敵のおもひよらざる拍子をもって……勝つ」とかいう教えは、海舟の「機会と着手……さえ誤らねば……」という着眼につながっていると行ってよいでしょう。「剣術でも技には限りがあるから、その上は心法だ。」となるのです。いずれにもせよ、両人を際立たせているのは、外にある何ものにも頼らない自信——臨西風にいえば〈無依〉——、独立自主の精神でした。武蔵の「真の空」とは「まよひの雲の晴れたところであり」、海舟の「無我無心」と異なることはありません。

- (7) 海舟は自己顕示欲の強い人ではありませんでした。「政治家の秘訣は……たゞ正心誠意の四字しかない」というところなどは「克己」に力点をおいて生きようとした西郷と一致します。武蔵は死の床で書いた「独行道」のなかで、「身を捨てても名利はすてず」と言ったほどで、俗世からはるかに隔った孤高の極地を目指しつづけたのですが、海舟は「柳生但馬〔守宗短〕は大したものだと、密かに驚いている。段々調べても、遺跡がない」と言い、平凡な表現ですが、‘百年の後に知己をうる’立場を強調しています。彼は自己の上に立つ者たちから信用されず恐れられました。「陛下はオレを御信用なさらない。……慶喜公でもそうだ。」君臣の「名分」にこだわらず、大義のあるところを指し示し、実践してはばからなかったからです。「徳川の臣などに至っては、それは実に小さなものサ。皆ンナ、三河武士の遺伝で、誰も忠義という区域から脱出したものはないよ。」「……ナニ、忠義の士というものがあって、国をつぶすのだ。己のような、大不忠、大不義のものがなければならぬ。」と毒舌を吐いています。

- (8) こうした海舟の自信・自立・自由は、自身がこの世の現実をしっかりとふまえて生きていると

いう確信があつてのものです。ですから、ひたすらに戦つて勝つとか目先の合理で利を博すとかいった実利主義的な考えには決して同調しませんでした。‘強いものが勝つて当然だ、したいようにしていいのだ’とは思わなかつたのです。とりわけアジアの他の国との関係についてはそうでした。日中韓の「三国合従連衡」という彼の幕末以来の持説と、「西洋は野蛮ぢゃ」という西郷の近代文明批判は全く一致していたのです。

晩年になって、「維新後、大機会をあやまったということは、いかなる場合ですか。」と聞かれて、「十年の西南戦争と、今度の朝鮮征伐〔日清戦争〕サ。しかし十年の時は、まだ善かつた。……どっちも勝つたものだから、実にいけない。……ズルズルだが、どうせ、これでいいと思う高慢が皆ソナいけないのだ。」と答えています。「伊藤さんの朝鮮独立の勅語などはどうするのか。」「世間では百戦百勝などと喜んで居れど、」「支那人は一国の帝王を差配人同様にしているヨ。地主にさえ損害がなければ、差配人はいくら代つても、少しも構わないのだ。……戦争に負けたのは、ただ差配人ばかり……といふことを忘れてはいけないヨ。二戦三戦の勝をもつて支那を軽蔑するは、支那を知る者にあらず。」とも言っています。「おれの意見は日本は朝鮮の独立保護のために戦つたのだから土地は寸尺も取るべからず。その代り沢山に償金をとる事が肝要だ。もっともその償金の使途は支那の鉄道を敷設するに限る。ツマリ支那から取つた償金で支那の交通の便をはかつてやる。支那は必ず喜んでこれに応ずるサ。」というのが彼の戦後についての処方箋でした。

ここで注目されてよいのは、海舟が中国をどのように認識していたかという点です。「全体、支那を日本と同じやうに見るのが大違ひだ。日本は立派な国家だけれども、支那は国家ではない。あれは人民の社会だ。政府などはどうなつても構はない。自分さへ利益を得れば、それで支那人は満足するのだ。」何故そうなのかという説明にはいまからみれば問題がないわけではありませんが、明治30年という時点でこれほど鋭く且つ深く中国社会をとらえた発言には驚くほかはありません。4千年来、中国にあつたのは‘中華思想’であつて、‘中国国家’はようやく第2次大戦後に成立した中華人民共和国にはじまるのです。

朝鮮についての評価は、中国に比べればそう甘くはありません。それでもこうは言っています。「朝鮮といへば、半亡国だとか、貧弱国だとか軽蔑するけれども、おれは朝鮮も既に蘇生の時機が来て居ると思ふのだ。およそ全く死んでしまふと、また蘇生するといふ、一国の生理に関する生理法が世の中にある。朝鮮をこれまで、実に死に瀕して居たのだから、これからきっと蘇生するだろうヨ。これが朝鮮に対するおれの診断だ。」

日清戦争〔明治27～28年〕の性格についてはさきに触れました。それが10年後の日露戦争〔明治37～38年〕と違つているのは、前者が‘起つてしまつた戦争’であつたのに、後者は自ら意図して‘起した戦争’だつたことです。この変化はまさに海舟のいう通り「これでいいと思う高慢が……いけない」のでした。しかし海舟の語り続けた‘アジアの連帯’に耳を傾ける者はほとんどなく、日本は西欧列強に肩を並べようと‘帝国主義’の路線をひたすら追ひ続けることになつたのでした。海舟が予期したように、彼がようやく知己をうるまでには、このと

きから百年を要したのです。

〔完〕